

單音聖歌譜



聖體禮儀

序 文

この単音聖歌譜の再版にあたりましては、全国各地域の教会の皆様が、お一人あるいは少人数でもお祈りの際に聖歌が歌えるように作られたものです。したがってできるだけ皆様一人一人がお持ちになり、日々のお祈りに御利用いただきたいと思います。またこの単音聖歌譜には祈祷文が同時に記されておりますので、この本があれば聖歌もお祈りも同時に覚えることができます。

祈りと聖歌は教会にとって、また個人の信仰生活にとっても重要な意味をもっています。皆様におかれましてはこの単音聖歌譜を御利用になり、信仰をたしかめられることを衷心よりお祈り申し上げます。

1981年2月

日本ハリストス正教会教団 府主教庁

聖 体 礼 儀



司 父と子と聖神の国は崇めほめらる、今も何時も世々に。 詠 「アミン」

大 連 禱

輔 われら安和にして主に祈らん。 詠「主憐めよ」

輔 上より降る安和とわれらが霊の救のために主に祈らん。 詠「主憐めよ」

輔 全世界の安和、神の聖なる諸教会の堅立、および衆人の合一のために主に祈らん。 詠「主憐めよ」

輔 この聖堂、および信とつつしみと神を畏るる心とをもって此処に来たるもののために主に祈らん。 詠「主憐めよ」

輔 教会を司るわれらの府主教(某)司祭の尊品、ハリストスによる輔祭職、とごとくの教衆、および衆人のために主に祈らん。 詠「主憐めよ」

輔 わが今上天皇、皇后、皇太子、皇太子妃、および皇族のために主に祈らん。 詠「主憐めよ」

輔 この都^{まち}邑とおよその都^{まち}邑と地方、および信をもって、この中におるもののために主に祈らん。 詠「主憐めよ」

輔 気候順和、五穀豊穰、天下泰平のために主に祈らん。 詠「主憐めよ」

輔 航海するもの、旅行するもの、病を患うるもの、艱難に遭うもの俘となりしもの、およびかれらの救のために主に祈らん。 詠「主憐めよ」

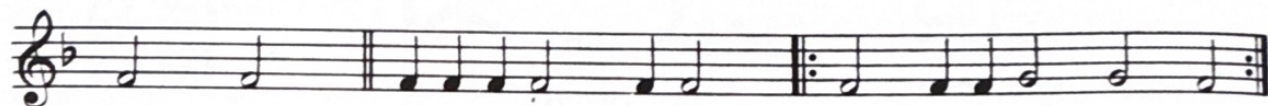
輔 われら諸の憂いと怒りと危きとを免かるるがために主に祈らん。 詠「主憐めよ」

輔 神や、なんじの恩寵をもってわれらを助け救い憐み守れよ。 詠「主憐めよ」

輔 至聖、至潔にして、至りて讃美たるわれらの光栄の女宰、生神女、永貞童女マリヤと諸聖人とを記憶して、われらおのれの身および互いに各々の身をもって、並びにことごとくのわれらの生命をもって、ハリストス神に委託せん。 詠「主なんじに」

輔 けだし、およそ光栄、尊貴、伏拝はなんじ父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、 詠 「アミン」

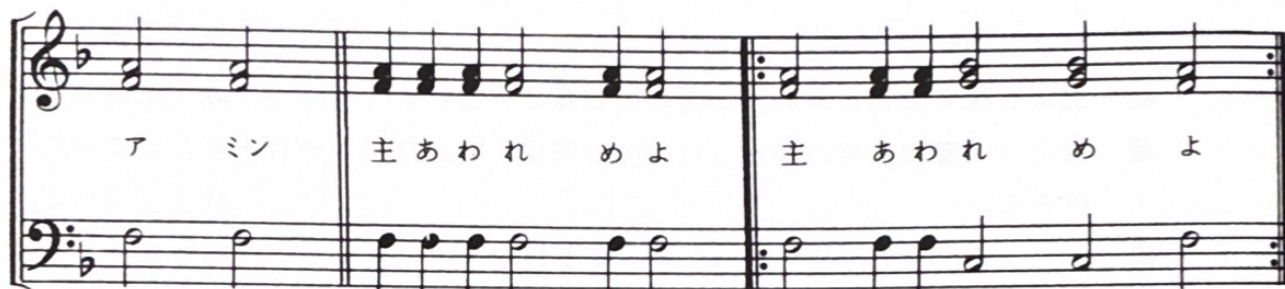
大連禱



ア ミン 主 あわれ めよ 主 あわれ めよ



主 なん じ に ア ミン



ア ミン 主 あわれ めよ 主 あわれ めよ



主 なん じ に ア ミン

(注) 二声部で歌う時は高音部譜表の二声部を歌えばよい。

或は高音部譜表の下側の譜と低音部(バス)とで歌ってもよい。

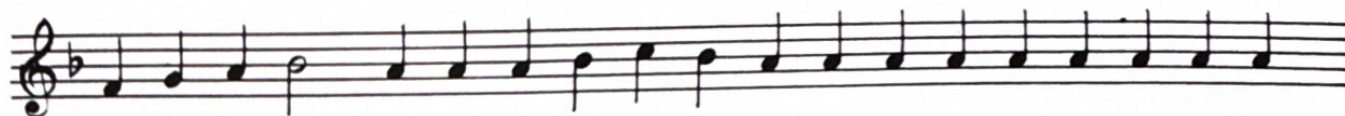
わが
霊や



わがたましいや主をほめあげよ、主やなんじ



はあがめほめらる、わがたましいや主をほ



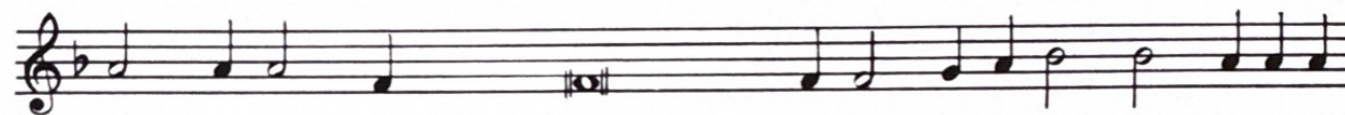
めあげよ、わがちゅうしんやそのせいなる名をほ



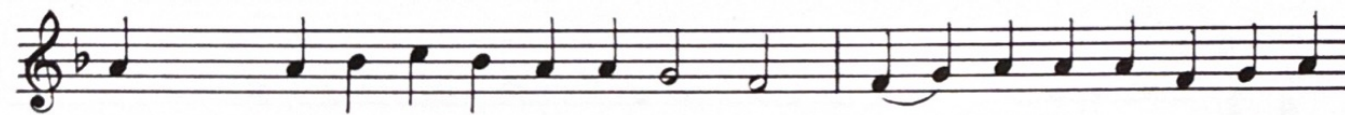
めあげよ、わがたましいや主をほめあげよ、



かれがことごとくの恩をわするるなかれ、



かれは、なんじがもろもろの不法をゆるし、なんじが



もろもろのやまいをいやす、光えいはちちと



子とせいしんにきす、いまもいつも世々



にアミン、わがたましいや主をほめあげよ、わ



小 連 禱

輔 われら、また又、安和にして主に祈らん。

詠 「主憐めよ」

輔 神やなんじの恩寵をもってわれらを佑け、救い、憐み、守れよ。

詠 「主憐めよ」

輔 至聖、至潔にして、至りて讃美たるわれらの光栄の女宰、生神女、永貞童女マリヤと諸聖人とを記憶して、われら己の身および互いに各々の身をもって、並びにことごとくのわれらの生命をもって、ハリストス神に委託せん。

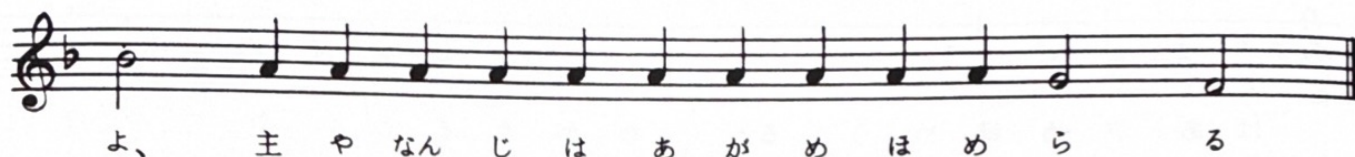
詠 「主なんじに」

司 けだし、権柄および国と権能と光栄はなんじ父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に。

詠 「アミン」

小
連
禱





小 連 禱

輔 われら、また又、安和にして主に祈らん。

詠 「主憐めよ」

輔 神やなんじの恩寵をもってわれらを助け、救い、憐み、守れよ。

詠 「主憐めよ」

輔 至聖、至潔にして、至りて讃美たるわれらの光栄の女宰、生神女、永貞童女マリヤと諸聖人とを記憶して、われら己の身および互いに各々の身をもって、並びにことごとくのわれらの生命をもって、ハリストス神に委託せん。

詠 「主なんじに」

司 けだし、権柄および国と権能と光栄はなんじ父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に。

詠 「アミン」

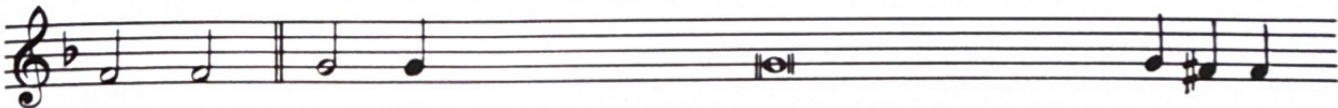
小
連
禱



主 あ わ れ め よ 主 あ わ れ め よ 主 なん じ に



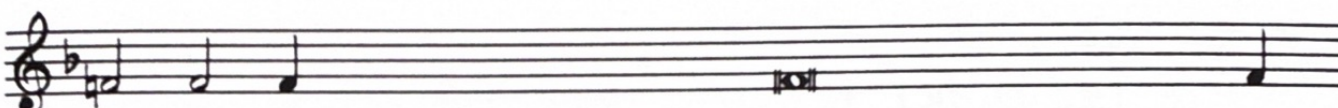
光榮は



ア シン 光 えいはちちと子とせいしんにきす、いまも



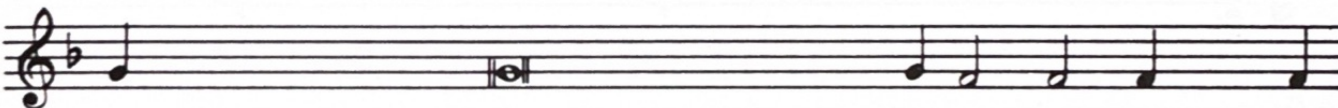
い つ も よ よ に ア ミ ン、 か み の 独 生 の 子 な ら び に こ と



ば や、死せざるものにしてわれらをすくわんがため



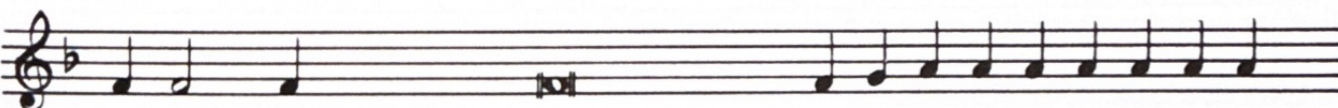
あまんじてせいなる生神女永貞童女マリヤよりみをと　り、　かみ



の性をかえずしてひととなり十字架にくぎうたれ、死をもって



死をふみやおりし ^{ハリス} ^{トス} か み や、 せ い 三 者 の い つ と



して、ちちとせいしんとともにさんえいせらるるの



主　　や、　わ　れ　ら　を　す　く　　い　た　ま　　え

小 連 禱

輔 われら、また又、安和にして主に祈らん。神やなんじの恩寵をもって、われ
らを助け、救い、憐み守れよ。

詠 「主憐めよ、主憐めよ」

輔 至聖、至潔にして、至りて讃美たるわれらの光栄の女宰、生神女、永貞童
女マリヤと諸聖人とを記憶して、われらおのれの身および互いに各々の身
をもって、並びにことごとくのわれらの生命をもって、ハリストス神に委
託せん。

詠 「主、なんじに」

司 けだし、なんじは善にして人を愛する神なり、われら光栄をなんじ父と子
と聖神に献ず、今も何時も世々に。

詠 「アミン」

小
連
禱

主 あ わ れ め よ、主 あ わ れ め よ

主 なん じ に ア ミン ア ミン

主 あ わ れ め よ 主 あ わ れ め よ

主 なん じ に ア ミン ア - - ミン



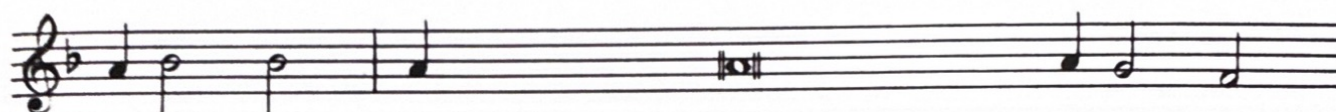
主よなんじのくににきたらんと きわれらをおもいたまえ、



こころのまずしきものはさいわいなり、天ごくは



かれらのものなればなり、なくものはさいわ



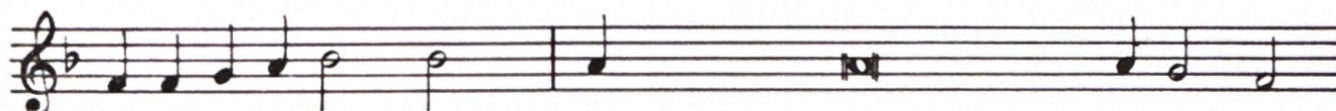
いなり、かれらはなぐさみをえんとすればなり、



おんじゅうなるものはさいわいなり、かれらは地を



つがんとすればなり、義にうえかわくものは



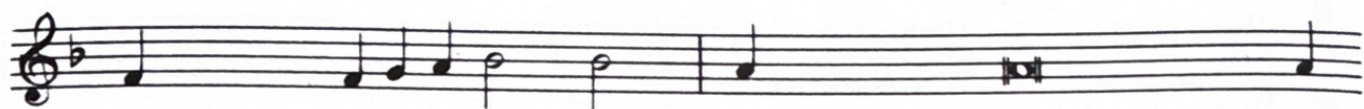
さいわいなり、かれらはあくをえんとすればなり、



あわれみあるものは、さいわいなりかれらは



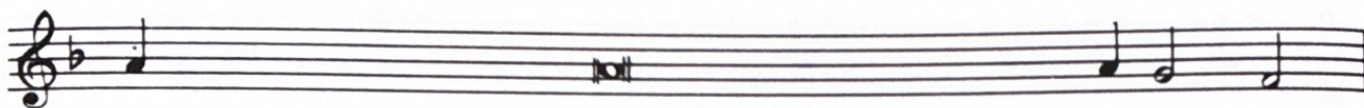
あわれみをえんとすればなり、こころのきよき



ものはさいわいなり、かれらはかみをみんとすれば



なりわへいをおこのうものはさいわいなり、



かれらはかみの子と名づけられんとすればなり、



義のためにきんちくせらるるものはさいわいなり、



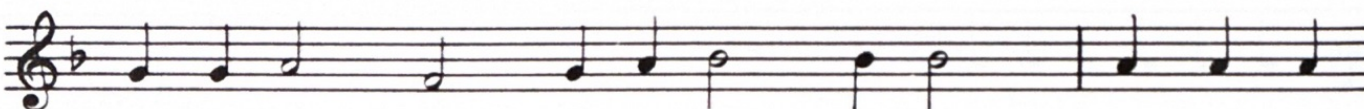
天ごくはかれらのものなればなり、ひとわがた



めになんじらをのしりきんちくし、なんじらのことを



いつわりてもろもろのあしきことばをいわんときなんじらさいわいなり、



よろこび、たのしめよ天には



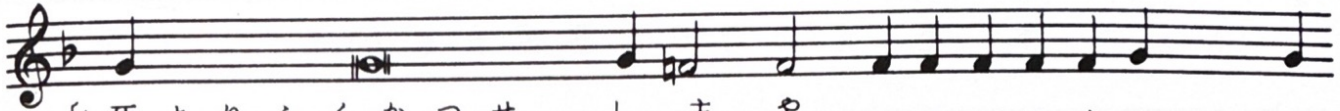
なんじらのむくいのおおければなり、

「輔」 えい知、謹みて立て。

聖
入
の
歌



きたれハリストスのまえにふしおがまん、かみの子



1. 死よりふくかつせし主やなんじにアリ・ルイヤを
2. 生神女のきとうによつて
3. 聖人におごそかにあらわるるの主や

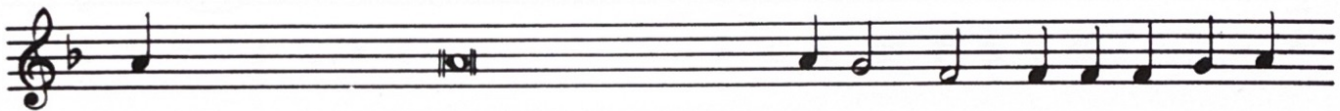


たてまつるわれらをすくいたまえ

ト
ロ
パ
リ
(1)



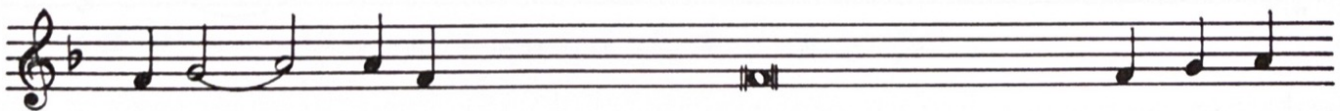
救世主やイウデヤのひとはかを封じて、へい



そつなんじのいさぎよきみをまもるとき、なんじはみつか



めにふくかつして、せかいにいのちをたまえり、



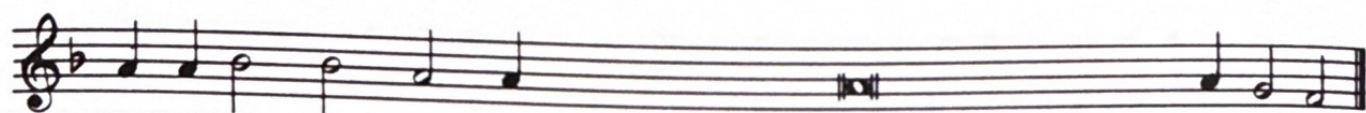
ゆえに天軍はなんじいのちをほどこすの主によんで



言う、ハリストスや光えいはなんじのふくかつにきし、光



えいはなんじのくににきす、ひとりひとりをいつくし

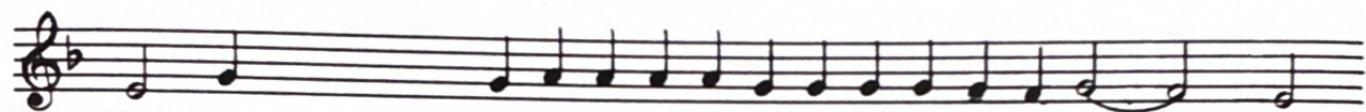


むの主や、光えいはなんじのおもんばかりにきす

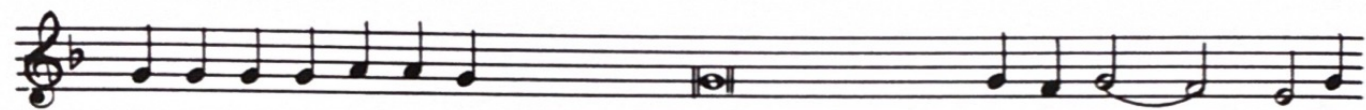
トロ
パリ
(2)



死せざるいのちやなんじ死にくだりしと



き、かみの性のひかりにてじごくをころせり、



死せしものを地下よりふくかつせしめしとき、天



軍みなよんでいえり、いのちをたもうの主ハリストス



わがかみや、光えいはなんじにきす

トロ
パリ
(3)



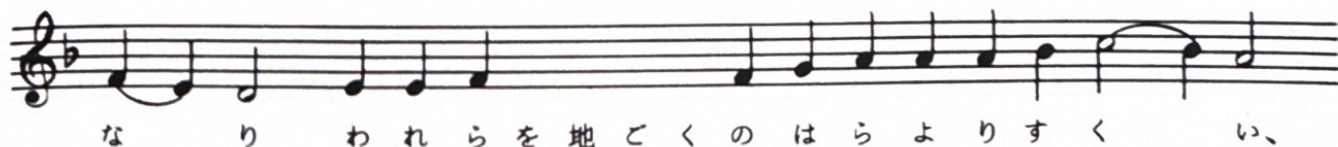
天にあるものたのしめよ、地にあるものよ



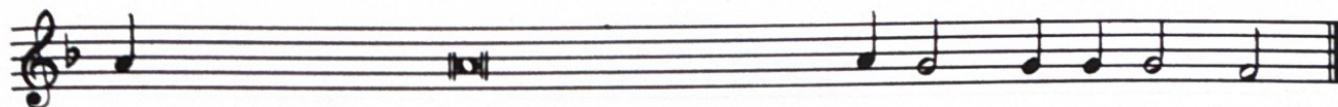
ろこべよ、主はそのひじのちからをあらわし



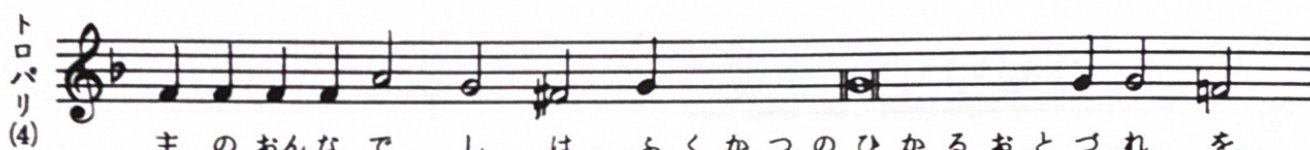
て 死をもって死をほろほ し、 ふくかつのはじめと



な り われらを地ごくのはらよりすく い、



世 かいにおおいなるあわれみをたま えばなり



主のおんなで し は ふくかつのひかるおとづれ を、



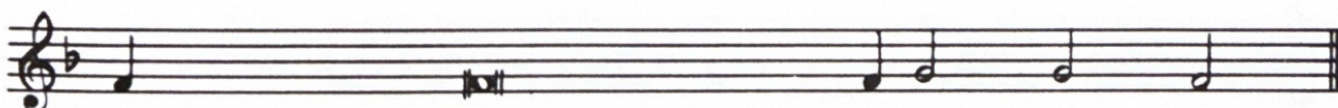
かみのつかいよりききうけ て、元祖よりのていざいを



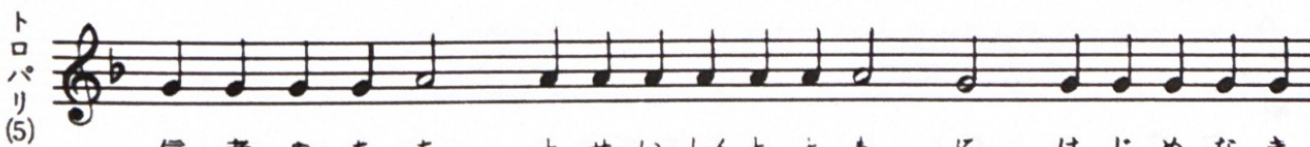
ふる いすて 使徒にほこりていえ り、死はほろ



ほされ ハリストス かみはふくか つして、世かいにおおい



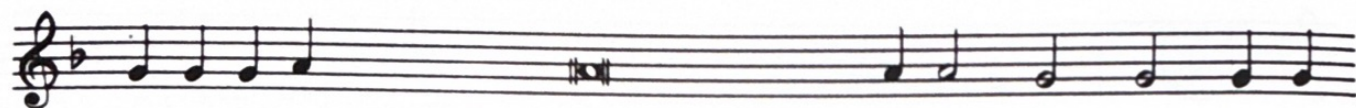
な る あ わ れ み を た ま え り



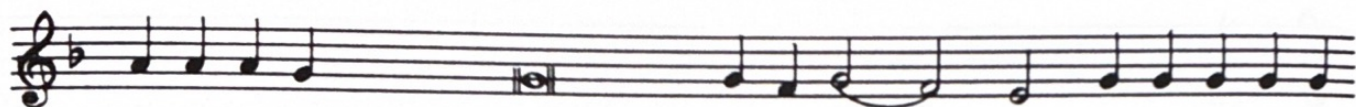
信者やちち とせいしんとともに、はじめなき



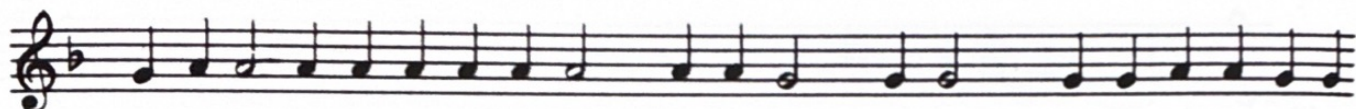
ことば わがすくいのため に、童 てい女よ



りうまれしものをほめうとうておがむべ し、かれあ



まんじてその身にて十字架にのほ り、死をしのび



その光えいのふくか つにて、死せ しものをふく

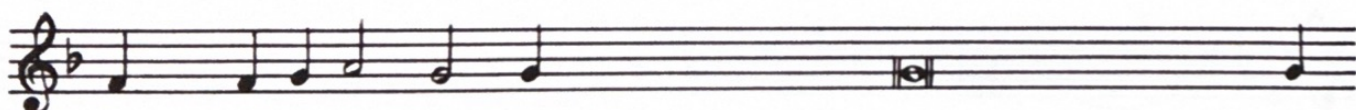


か つ せ し め た ま え ば な り

トロ
パリ



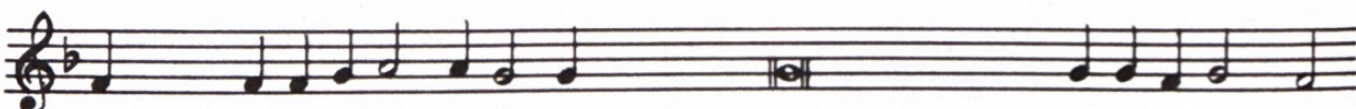
(6) 神使の軍なんじのはかにあらわれ し に、番べい死せる



ものごと し、マリヤはかにたちてなんじのいさぎよき



からだをたずね り なんじはちどくにいざなわれずして

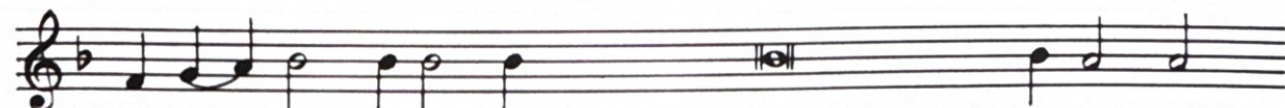


ちどくをとりこ にし、いのちをたもうて処女にあいたま え



り、死よりふくかつせし主や、光えいはなんじにきす

トロ
バリ
(7)



ハリストかみや、なんじは十字架にて死をほろぼし、



とうぞくのために天堂をひらき、携香女のかなしみ



をなぐさめ、使徒になんじがふくかつして、世界におおい



なるあわれみをたまいにしをつたえさせたまえり

トロ
バリ
(8)



めぐみふかき主や、なんじはたかきよりくだり、



みかのほうむりをうけて、われらをくるしみよりときたまえり、

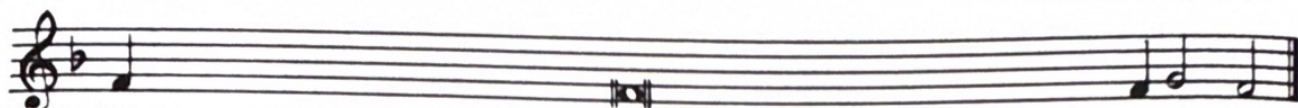


わがいのちとふくかつなる主や、光えいはなんじにきす

司 けだし、わが神や、なんじは聖なり、われら光栄をなんじ父と子と聖神に献ず、今も何時も。(輔祭なきときは「世々に」と続ける)

輔 主よ敬虔なるものを救い、およびわれらに聞きいれ給え（輔祭なきときはこれと次の聖歌を省略する）

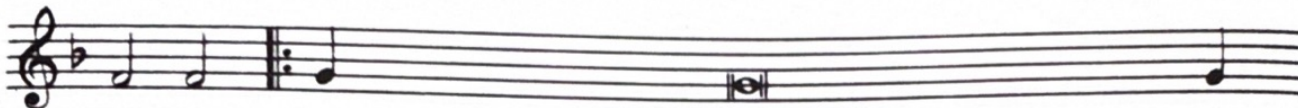
主よ
敬虔
なる
者



主よ、けいけんなるものをすくい、およびわれらにききいれ たま え

輔 世々に

聖
なる
神

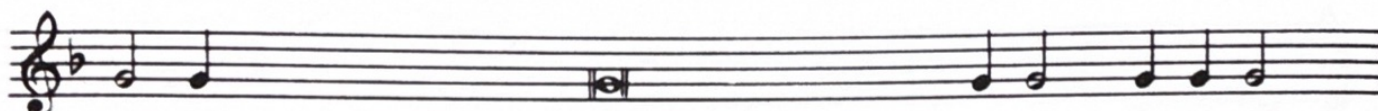


ア ミン せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる常生のもの

三 度



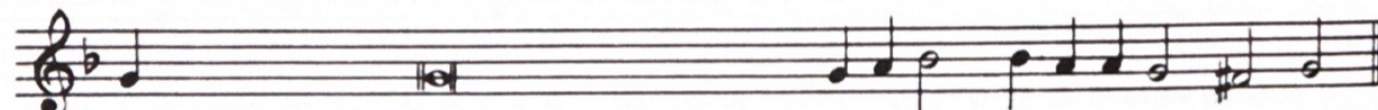
や、 わ れ ら を あ わ れ め よ



光 えいはちちとことせいしんにきすいまもいつも よ よ に、アミン。



せいなる常生のものや、われら をあわれ め よ せいなる



かみ、せいなるゆうきせいなる常生のものや、われら をあわれ め よ

輔 謹みて聞くべし

司 衆人に平安

誦 なんじの神にも

司 えい知

誦 ポロキメン

主　　や、　わ　れ　ら　なん　じ　を　た　の　む　が　と　く、　なん　じ　の

[illegible]

②



主はわがちからとわがうたなり、かれは

わ が す く い と な れ り

(3) 

ボロキメン(4)



主 や なん じ の し わ ぎ は なん ぞ 多 き や、

み な ち え を も っ て つ く れ り

ボロキメン (5)

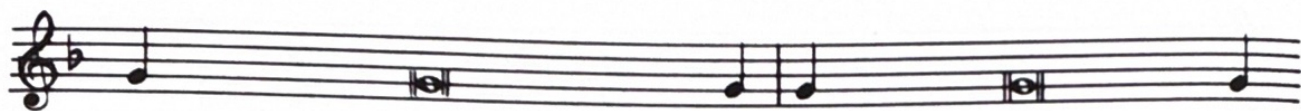


主やなんじわれらをたちわれらをまもりて、



このよよりえいえんにいたらん

ポ
ロ
キ
メ
ン



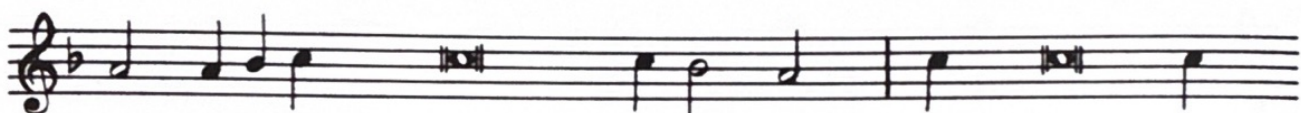
(6)

主やなんじのたみをすくい、なんじの業にふくを



くだしたまえ

ポ
ロ
キ
メ
ン



(7)

主はそのたみにちからをたまひ、主はそのたみ



にへいあんのふくをくださん

ポ
ロ
キ
メ
ン



(8)

主なんじらのかみに、ちかいをなしてつぐなえよ

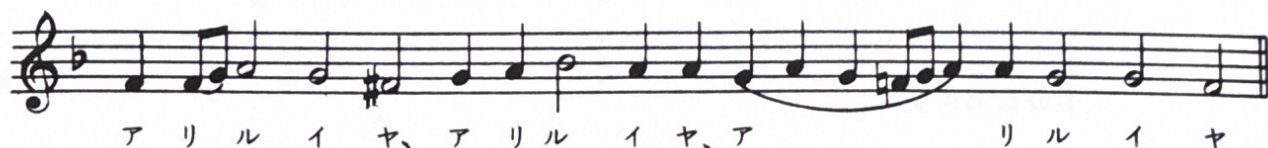
輔 えい知

誦 聖使徒パウエルがローマ人(コリンプ人等)に達する書の読み。

輔 謹んで聞くべし。

誦 (使徒経を読む)

書
礼
の
後

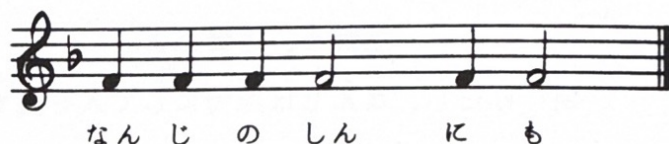


輔 君や、聖使徒および福音者（某）の福音を宣ぶるものに祝福せよ。

司 願わくは神、光栄にして讃美たる聖使徒および福音者（某）の祈禱によりて、なん
じ福音を宣ぶるものに多くの力ある言を賜わん、その至愛の子わが主、イエス、
ハリストスの福音の行なわるるがためなり。

輔 アミン。

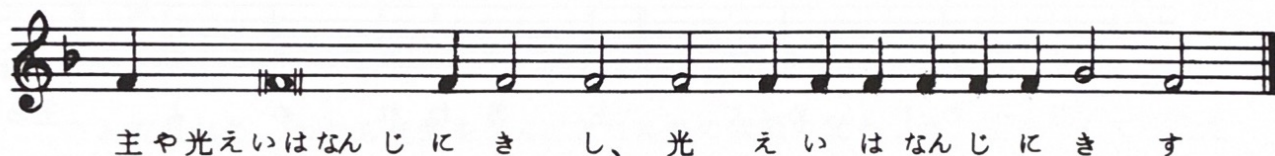
司 えい知、謹みて立て、聖福音経を聞
くべし。



司 衆人に平安。 詠 なんじの神も。

輔 （某）伝の聖福音経の読み。

福
音
の
前
後



重 連 禱

輔 われらみな霊を全うして言わん、われらの思いを全うして言わん。

詠 主憐めよ。

輔 主全能者、わが列祖の神や、なんじに祈る、聞き入れて憐めよ。

詠 主憐めよ。

輔 神や、なんじの大いなる憐みによりてわれらを憐めよ、なんじに祈る聞き入れて憐
めよ。

詠 主憐め、主憐め、主憐めよ。

輔 また、わが今上天皇、皇后、皇太子、皇太子妃、および皇族のために祈る。

詠 主憐め、主憐め、主憐めよ。

輔 また教会を司るわれらの府主教（某）およびハリストスに於けることごとくのわれ
らの兄弟のために祈る。

詠 主憐め、主憐め、主憐めよ。

輔 また、われらの兄弟、諸司祭、諸修道司祭、およびハリストスに於けるわれらの衆兄弟のために祈る。

詠 主憐め、主憐め、主憐めよ。

輔 また、常に記憶せらるるこの聖堂の建立者、およびすでに寝りしことごとくの父祖兄弟、この所と諸方とに葬むられたる正教のもののために祈る。

詠 主憐め、主憐め、主憐めよ。

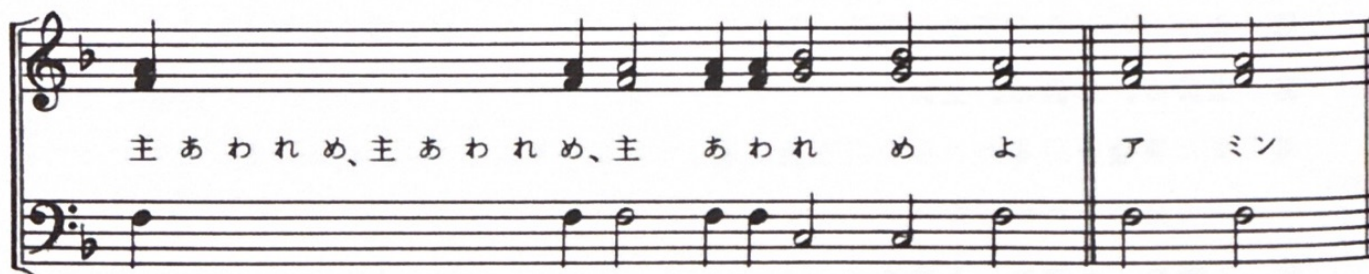
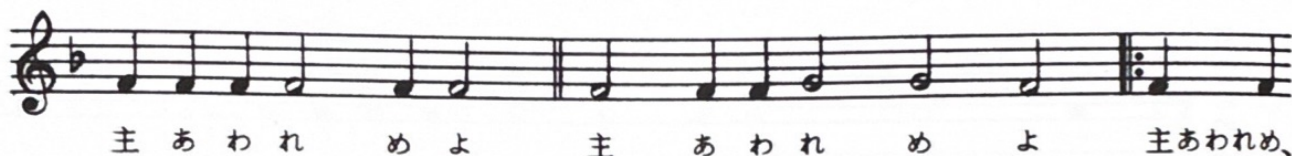
輔 また、この至尊なる聖堂に物をたてまつり、善業を行ない、これに勞し、これに歌い、およびここに立ちてなんじの大いにして豊なる憐みを仰ぎ望むもののために祈る。

詠 主憐め、主憐め、主憐めよ。

司 けだし、なんじは慈憐にして人を愛する神なり、われら光榮をなんじ父と子と聖神に献ず、今も何時も世々に。

詠 アミン。

重
連
禱



死者のための連禱（場合によっては省略することがある）

輔 神や、なんじの大いなる憐みによりてわれらを憐めよ、なんじに祈る、聞き入て憐めよ。

詠 「主憐め、主憐め、主憐めよ」

輔 また眠りし神の奴婢（某）の霊の安息のため、およびかれ（ら）におよそ自由と自由ならざる罪のゆるされんがために祈る。

詠 「主憐め、主憐め、主憐めよ」

輔 主神がかれ（ら）の霊を諸義人の安息するところに入れ給わんことを祈る。

詠 「主憐め、主憐め、主憐めよ」

輔 かれ（ら）に神の憐みと天国と諸罪のゆるしとを賜わんことを、ハリストスわが死せざるの王および神に願う。

詠 「主賜えよ」

輔 主に祈らん。

詠 「主憐めよ」

司 けだし、ハリストスわれらの神や、なんじは眠りしなんじの奴婢（某）の復活と生命と安息なり。われら光栄をなんじとなんじの無原の父と至聖、至善にして生命を施すなんじの神とに献ず、今も何時も世々に。

詠 「アミン」

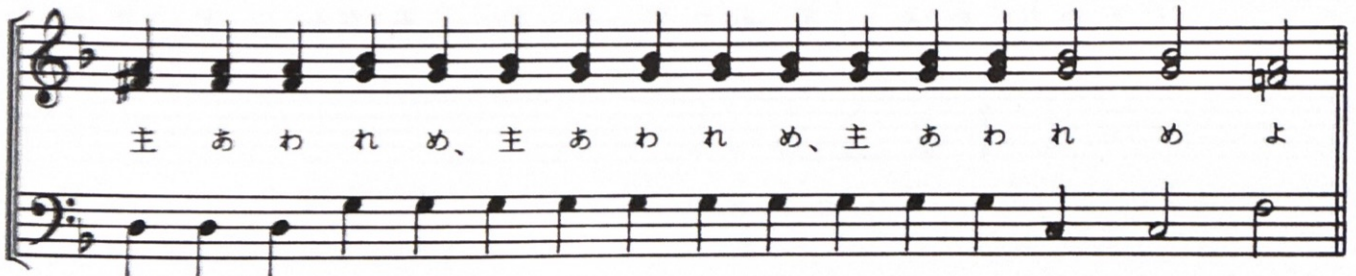
死者の記憶



主 あ わ れ め、主 あ わ れ め、主 あ わ れ め よ



主 た ま え よ 主 あ わ れ め よ ア ミン



主 あ わ れ め、主 あ わ れ め、主 あ わ れ め よ



啓蒙者の連禱

輔 啓蒙者や、主に祈るべし。

詠 「主憐めよ」

輔 信者や啓蒙者のために祈らん、願わくは主はかれらに憐みを垂れん。

詠 「主憐めよ」

輔 真実の言をもってかれらを啓蒙せん。

詠 「主憐めよ」

輔 義の福音経をかれらに開かん。

詠 「主憐めよ」

輔 かれらをその聖公使徒の教会に一にせん。

詠 「主憐めよ」

輔 神や、なんじの恩寵をもって、かれらを救い憐み佑け守れよ。

詠 「主憐めよ」

輔 啓蒙者や、なんじらの首を主に屈めよ。

詠 「主なんじに」

司 願わくは、かれらもわれらと共に、なんじ父と子と聖神の至尊、至栄の名を讃揚せん、今も何時も世々に。

詠 「ア ミ ン」

啓蒙者の連禱



小 連 禱

輔 衆啓蒙者出でよ、啓蒙者出でよ、衆啓蒙者出でよ、啓蒙者一人もなく、ただ信者また又、安和にして主に祈らん 詠 「主憐めよ」

輔 神やなんじの恩寵をもって、われらを助け救い憐み守れよ。 詠 「主憐めよ」

輔 えい知。

司 けだし、およそ光栄、尊貴、伏拝はなんじ父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に。

詠 「アミン」

信 者 の 連 禱

輔 われら、また又、安和にして主に祈らん。 詠 「主憐めよ」

輔 上より降る安和とわれらが霊の救のために主に祈らん。 詠 「主憐めよ」

輔 全世界の安和、神の聖なる諸教会の堅立、および衆人の合一のために主に祈らん。

詠 「主憐めよ」

輔 この聖堂、および信と謹みと神を畏る心とをもって、ここに来たるもののために主に祈らん。 詠 「主憐めよ」

輔 われら諸の憂いと怒りと危きとを免かるがために主に祈らん。

詠 「主憐めよ」

輔 神や、なんじの恩寵をもって、われらを助け救い憐み守れよ。 詠 「主憐めよ」

輔 えい知。

司 われら常になんじが権柄の下に守られて光栄をなんじ父と子と聖神に献ずるがためなり。今も何時も世々に。

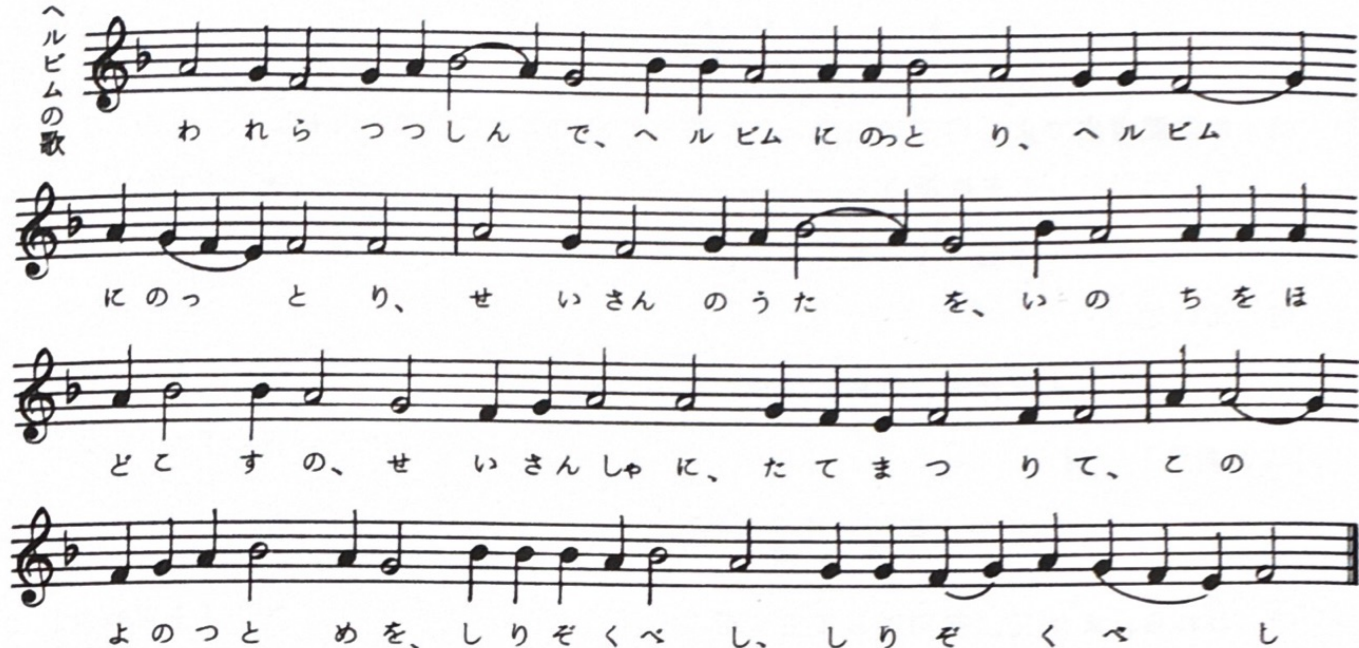
詠 アミン。

「司祭のみ奉事の際は省略する」



主 あ わ れ め よ 主 あ わ れ め よ ア ミン

ヘルビムの歌



輔 願わくは主、神はその国に於て、わが今上天皇、皇后、皇太子、皇太子妃および皇族
 を常に記憶せん、今も何時も世々に。

司 願わくは主、神はその国に於て、教会を司どるわれらの府主教(某)司祭、輔祭、詠隊
 および教衆を常に記憶せん、今も何時も世々に。

司 願わくは主、神はその国に於て、常に記憶せらるゝ眠りしわれらの府主教セルギイ、
 主教ニコライ(その他某)を常に記憶せん、今も何時も世々に。

司 願わくは主、神はその国に於て、なんじ衆、正教のハリスティアニンらを常に記憶
 せん、今も何時も世々に。



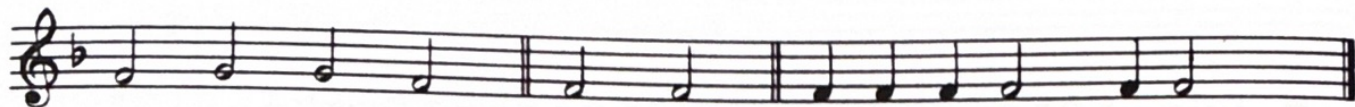
増 連 禱

- 輔 われら主の前にわが祈りを増し加えん。 詠 「主憐めよ」
- 輔 献げたる尊き祭品のために主に祈らん。 詠 「主憐めよ」
- 輔 この聖堂、および信と謹みと神を畏るる心とをもって、ここに来たるもののために主に祈らん。 詠 「主憐めよ」
- 輔 われら、もろもろの憂いと、怒りと、危きとをまぬかるるがために主に祈らん。 詠 「主憐めよ」
- 輔 神や、なんじの恩寵をもって、われらを助け、救い、憐み、守れよ。 詠 「主憐めよ」
- 輔 この日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む。 詠 「主賜えよ」
- 輔 平安の神使、正しき教導師、わが霊体の守護者を賜わんことを主に求む。 詠 「主賜えよ」
- 輔 われらの罪と過とをなだめ、ゆるさんことを主に求む。 詠 「主賜えよ」
- 輔 われらの霊に善にして益あること、および世界に平安を賜わんことを主に求む。 詠 「主賜えよ」
- 輔 われらの生命の余日を平安と、痛悔とをもって終らんことを主に求む。 詠 「主賜えよ」
- 輔 われらの生命の終りがハリストイアニンに適い、病なく、恥なく、平安なること、およびハリストスの恐るべき審判に於て宜しき答えをなすを賜わんことを求む。 詠 「主賜えよ」
- 輔 至聖、至潔にして至りて讃美たるわれらの光栄の女宰、生神女、永貞童女マリヤと諸聖人とを記憶して、われらおのれの身、および互いに各々の身をもって、ならびにことごとくのわれらの生命をもってハリストス神に委託せん。 詠 「主、なんじに」
- 司 なんじの独生子の慈憐によりてなり、なんじはかれと至聖、至善にして生命を施す、なんじの神と共にあがめほめらる、今も何時も世々に。 詠 「アミン」
- 司 衆人に平安。 詠 「なんじの神にも」

増
連
禱



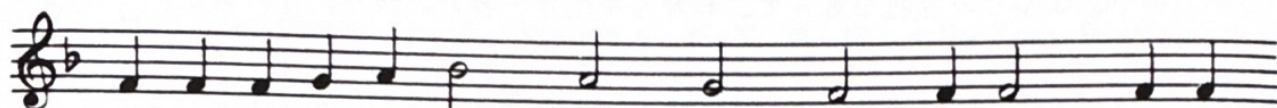
主 あわれ め よ 主 あわれ め よ 主 た ま え よ



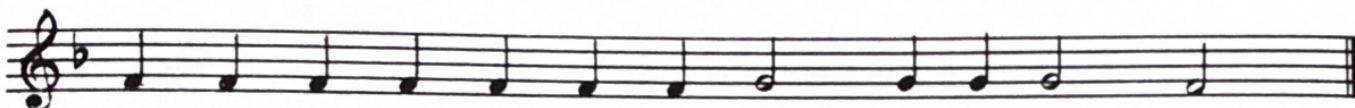
主 なん じ に ア ミン なん じ の しん に も

輔 われら互いに相愛すべし、同心にして承け認めんがためなり。

父
と
子
と
聖
神

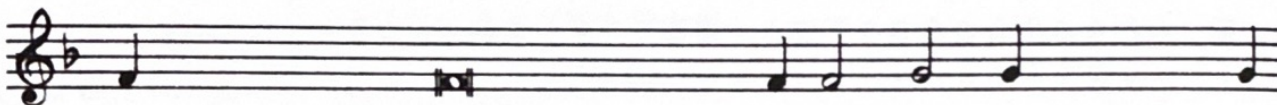


ち ち と 子 と せ い しん の いっ た い に



し て わ か れ ざ る せ い 三 者 を
司 門、門、謹みて聞くべし。

信
經



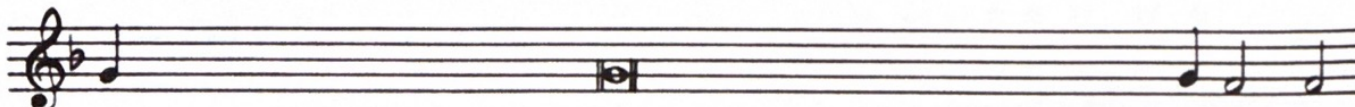
わ れ 信 ず ひ と つ の か み ち ち 全 能 者、天と地見ゆる



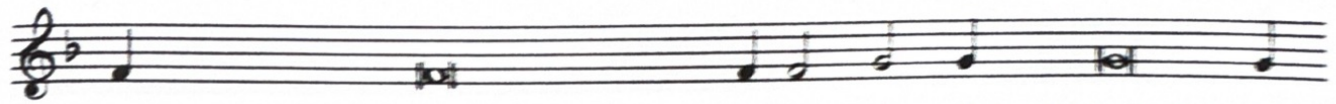
と 見 え ざ る ば ん ぶ つ を つ く り し 主 を、また信ずひとつの主



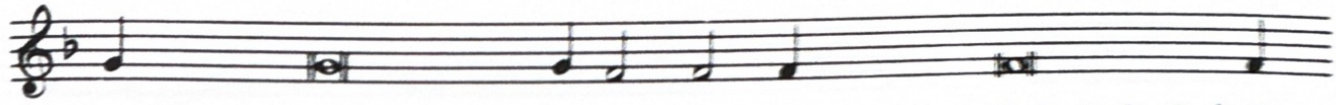
イ ス ス ハ リ ス ト ス か み の ど く せ い の 子、よろずよのさきにちちより



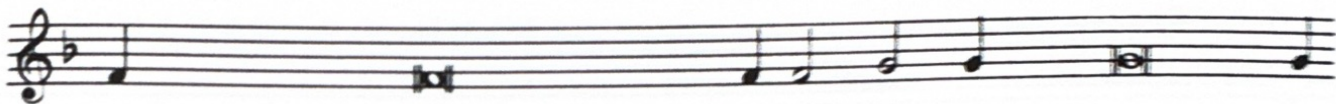
う ま れ ひ か り よ り の ひ か り ま こ と の か み よ り の ま こ と の か み、



うまれしものにてつくられしにあら ず、ちちといつたいに



してばんふつかれにつくら れ われらひとひとのためまた



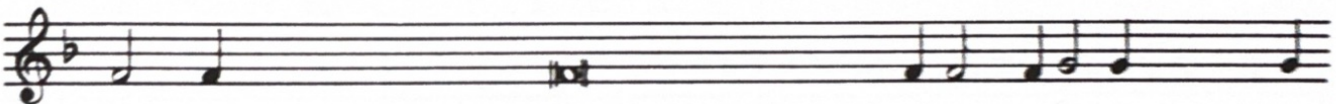
われらのすくいのために天よりくだ り、せいしんおよび童貞



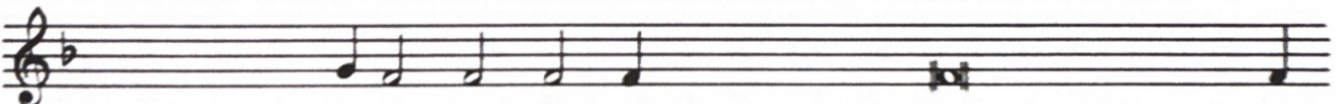
女マリヤより身をととりひととな り、われらのためにポン テイ



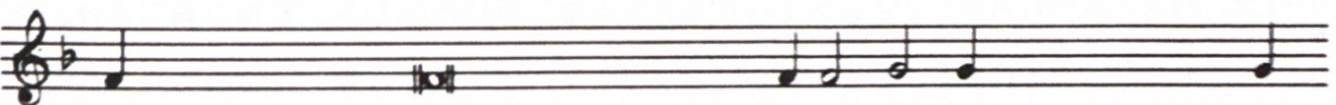
ピラトのとき十字架にくぎうた れ、くるしみをうけほうむら



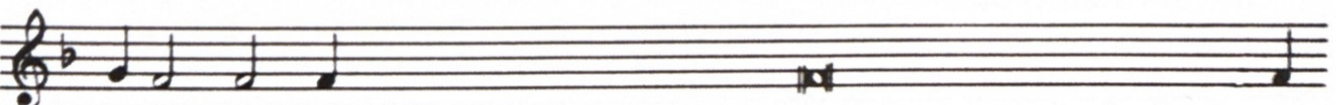
れ、だい三じつにせいしよにかのうてふくか っし天にのほり



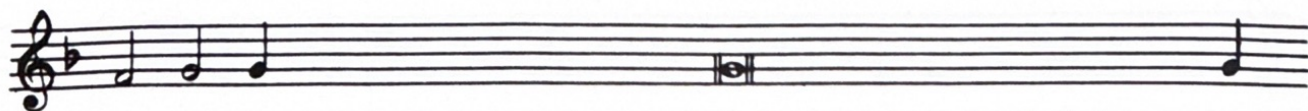
ちちのみぎにざ し、光 えいをあらわしていけるものと死せ



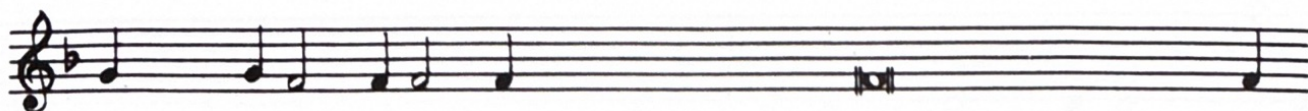
しものをしんばんするのためにまたきた り、そのくにおわりな



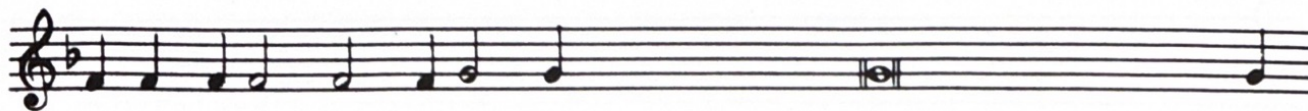
からん を また信ずせいしん主いのちをほどこすものちちより



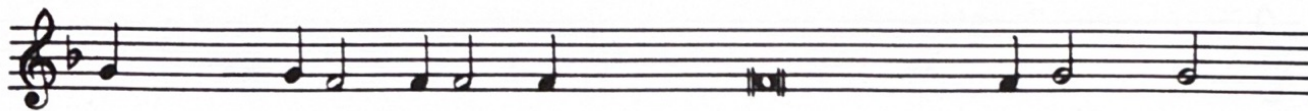
い で、ちちおよび子とともにおがまれほめられ予言者をもって



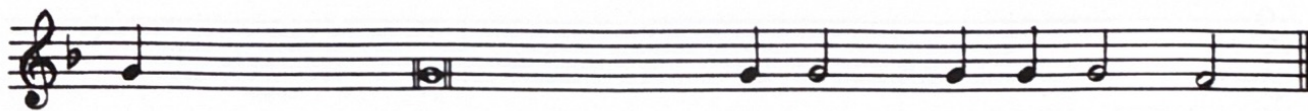
かつていいしを、また信ずひとつのせいなるおおやけなる



使徒の教かいを、われみとむひとつの洗礼もってつみの



ゆるしをうるを、われのぞむ死者のふくかつ



ならびにらいせいのいのちをアミン

輔正しく立ち、畏れて立ち、謹みて安和にして聖なる献げものを奉らん。

親
し
み
の
献
物



したしみのささげもの、ほめあげのまつりを

司願わくは、わが主、イエス・ハリストスの恩、神父の慈しみ、聖神の親しみは、なんじ衆人と共にあらんことを。

詠「なんじの神にも」

司心、上に向かうべし。

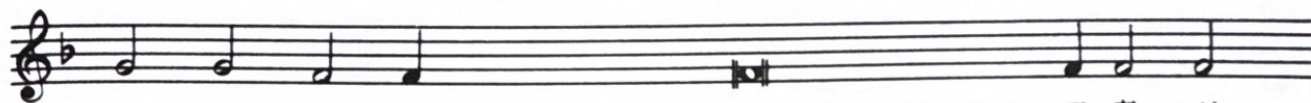
詠「主にむかえり」

司主に感謝すべし。

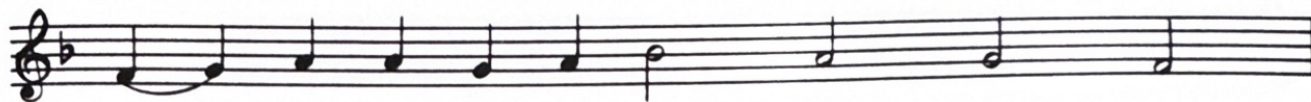
詠「父と子と聖神」



なんじのしんにも主にむかえりちちと子と



せ い しん、いっ たい に して わ か れ ざ る せ い 三 者 は、



と う と み お が ま る べ し

司 凱歌を歌い、呼び、叫びて言う。



せ い、せ い、せ い な る 主 サ ワ オ フ、天 地 に なん じ の



光 え い は あ ま ね し い と た か き に



オ サ ン ナ、主 の 名 に て き た る も の は は あ が め



ほ め ら る、い と た か き に オ サ ン ナ ア ミ ン

司 取りて食え、これわが体、なんじらのためにさかるるもの、罪の赦しを得るを致す。

詠 「ア ミ ン」*1

司 皆これを飲め、これわれの新約の血、なんじら、および衆くの人のために流さるるもの、罪の赦しを得るを致す。

詠 「ア ミ ン」*2

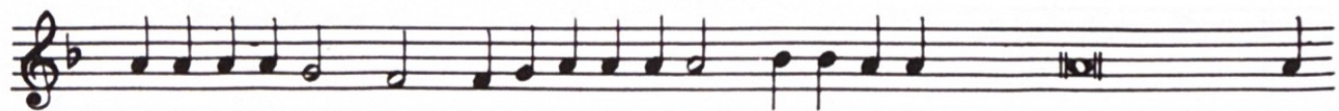
司 なんじの賜を、なんじの諸僕より、衆のため、一切のために、なんじに献りて。

*2



司 殊に至聖、至潔にして至りて讃美たるわれらの光栄の女宰、生神女、永貞童女マリヤのため。

常に
幸い



親しみの献物
聖大ワシリイの



したしみのささげもの ほめあげのまつ

りをなんじのしん、にも主にむかえり

ちちと子とせいしん、ちちと子と

せいしん いっただいにして、わかれ

ざるせいさんしやは、とうとみおがまるべし、

とうとみおがまるべし せい、せい

い、せいなる主、せいなる主 サワ

オフ 天地に、なんじの光 えいはあまね

しいとたかきにオサンナ、いとたかきにオサン



ナ、主の名に てきた る も の は、主の名に



てきた る も の は、あ が め、あ



が め ほ め ら る、いとたかきに



オ サン ナ、いとたかきに オ サン ナ



ア ミン ア ミン



主 や なん じを あ が め う た い、主 や なん じ



を あ が め う た い、なん じを ほ め あ げ、なん



じを ほ め あ げ、なん じに かんしゃ し なん



じに かん しゃ し、 わ が か みやなん じに い の る



い の る、 わ が か みやなん じに い の る、



わ が か みや、なん じに い の る い の る、



わ が か みやなん じに い の る、 なん じに い の る

恩寵を満ち被る者



おん ちょう を み ち こうむるも の や、 か み の つ か い の む れ



と ひ と の や か ら は、 み な なん じを よ ろ こ ぶ、



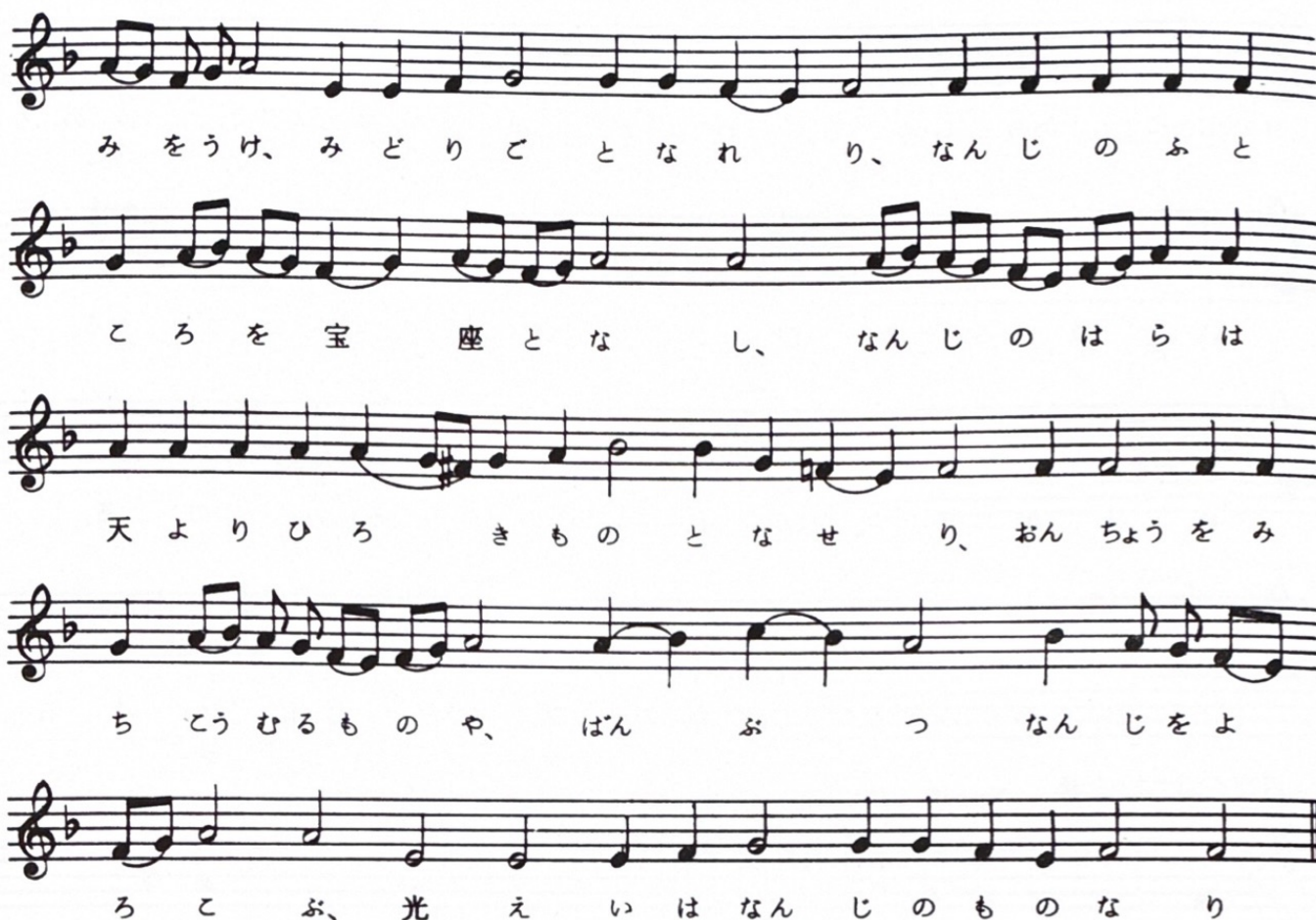
なん じ は せ い せ ら れ し でん、 ち え な る 天



堂 童 て い 女 の ほ ま れ な り、 よ の な



き さ き よ り わ が か み な る も の、 なん じ よ り

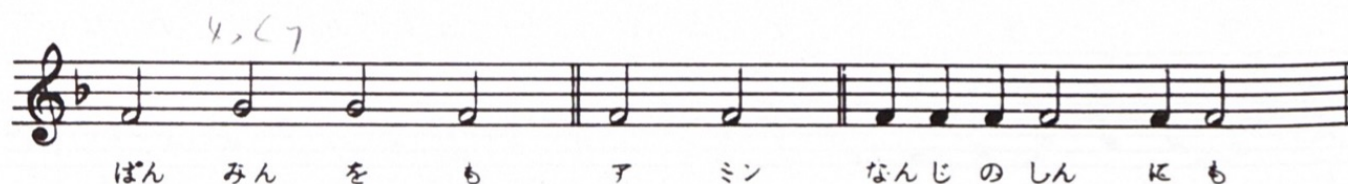


司 主や、殊に教会を司どる府主教(某)を記憶し、かれを平安、無難、尊貴、壮健、長
 寿なるもの、およびなんじが真実の言を正しく伝うるものとして、なんじの聖なる
 教会に与え給え。 詠 「万民をも」

司 ならびにわれらに口を一にし、心を一にして、なんじ父と子と聖神の至尊、至嚴の
 名を讃栄、讃頌するを賜え、今も何時も世々に。

詠 「アミン」

司 願わくは大いなる神、わが救主、イエス・ハリストスの憐みはなんじ衆人と共に
 あらんことを。 詠 「なんじの神にも」



増 連 禱

輔 われら諸聖人を記憶して、又また安和にして主に祈らん。 詠 「主憐めよ」

輔 すでに献ぜられ、および聖にせられし尊き祭品のために主に祈らん。

詠 「主憐めよ」

輔 人の愛するわが神が、これをその聖なる天上の無形の祭壇におき、属神の馨香として受け、われらに報いて神妙の恩寵と聖神の賜とを降すがために祈らん。

詠 「主憐めよ」

輔 われら諸の憂いと怒りと危きとをまぬがるるために主に祈らん 詠 「主憐めよ」

輔 神や、なんじの恩寵をもって、われらを助け、救い、憐み守れよ。

詠 「主憐めよ」

輔 この日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む。 詠 「主賜えよ」

輔 平安の神使、正しき教導師、わが霊体の守護者を賜わんことを主に求む。

詠 「主賜えよ」

輔 われらの罪と過とをなだめ赦さんことを主に求む。 詠 「主賜えよ」

輔 われらの霊に善にして益あること、および世界に平安を賜わんことを主に求む。

詠 「主賜えよ」

輔 われらの生命の余日を平安と痛悔とをもって終らんことを主に求む。

詠 「主賜えよ」

輔 われらの生命の終りが、ハリスティアニンに適い、病なく、恥なく、平安なること、およびハリストスの畏るべき審判に於て宣しき答をなすを賜わんことを求む。

詠 「主賜えよ」

輔 信の同一と、聖神の体合とを求めて、われらおのれの身、および互いに各々の身をもって、ならびにことごとくのわれらの生命をもって、ハリストス神に委託せん。

詠 「主なんじに」

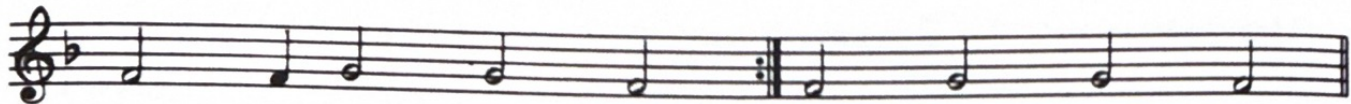
司 主宰や、われらに勇みをもって、罪を得ずして敢てなんじ天の神、父を呼びて言うを賜え。

詠 「天に在す」

増
連
奏

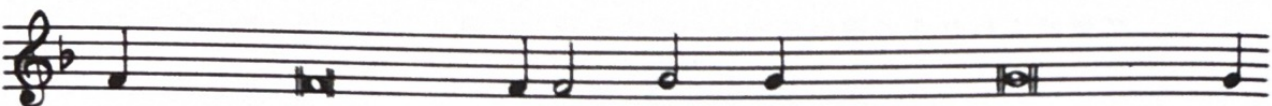


主 あ わ れ め よ 主 あ わ れ め よ

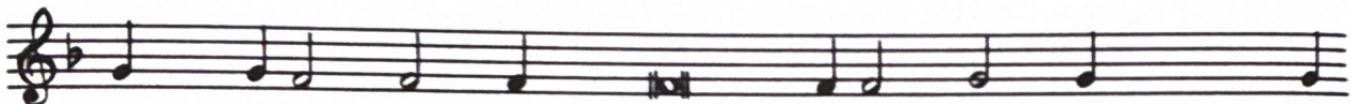


主 た ま え よ 主 な ん じ に

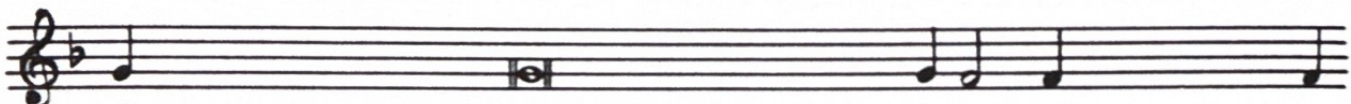
天
に
い
ま
す



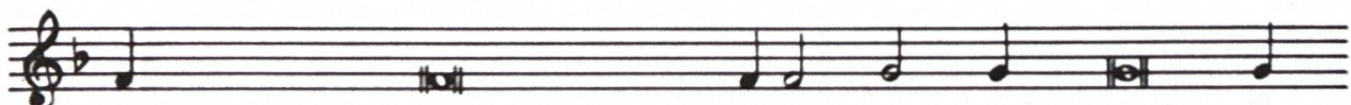
天 に います わ れ ら の ち ち や、 ね が わ く は な ん じ の 名 は



せ い と せ ら れ な ん じ の く に は き た り、 な ん じ の む ね は



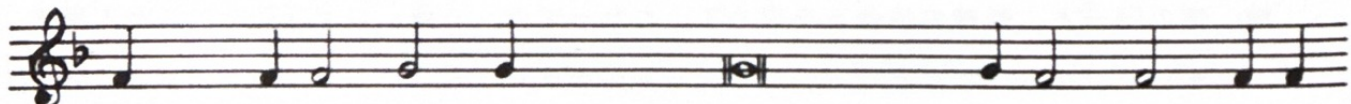
天 に お こ な わ る る が ご と く 地 に も お こ な わ れ ん、わ が に ち よ う の



か て を こ ん に ち わ れ ら に あ た え た ま え、 わ れ ら に お い め



あ る も の を わ れ ら ゆ る す が ご と く、 わ れ ら の お い め を



ゆ る し た ま え、 わ れ ら を い ざ な い に み ち び か ず、 な お



わ れ ら を き よ う あ く よ り す く い た ま え

司 けだし、国と権能と光栄は、なんじ父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に。

詠 「アミ ン」

司 衆人に平安。

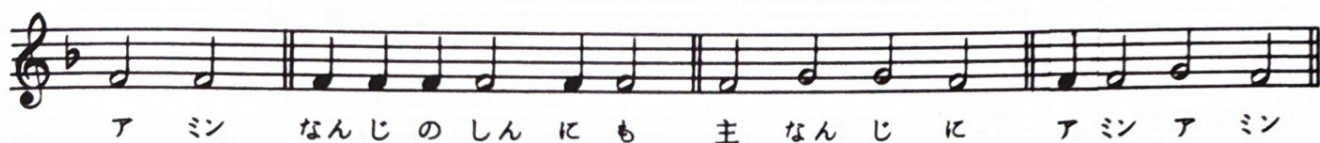
詠 「なんじの神にも」

輔 なんじらの首を主に屈めよ。

詠 「主、なんじに」

司 なんじが独生子の恩寵と慈憐と仁愛とによりてなり、なんじはかれと、至聖至善にして生命を施すなんじの神と共に讃揚せらる、今も何時も世々に。

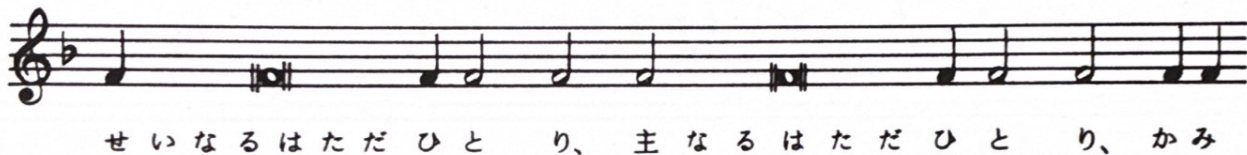
詠 「アミ ン」



輔 謹みて聞くべし。

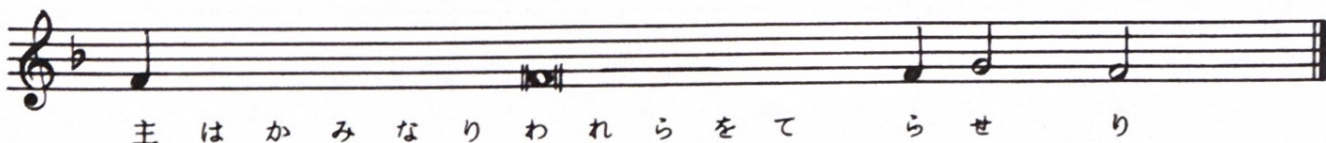
司 聖なるものは聖なる人に。

聖なるは唯独り



司 神をおそるる心と信とをもって近づき来たれ。

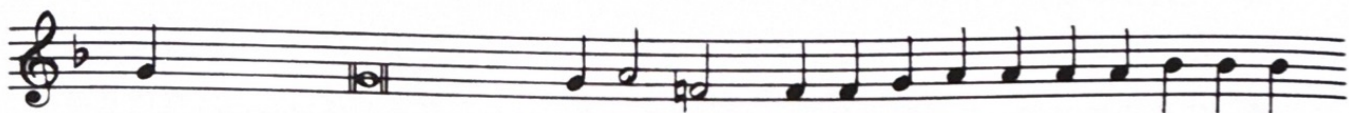
主
て
の
来
る
名
に
よ
つ
の



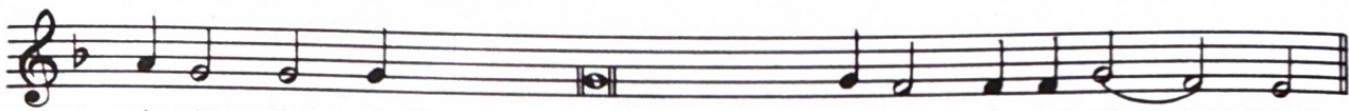
司 神やなんじの民を救い、およびなんじの嗣業に福を降せ。



すでにまことのひかりをみ、天のせいしんをうけ



ただしきおしえをえて、わかれざるせい三者を

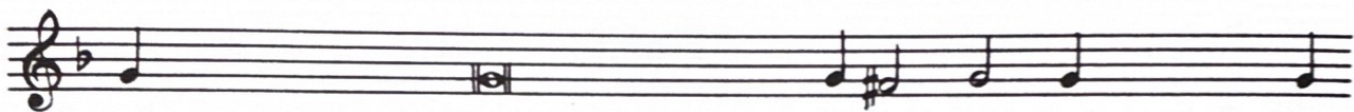


おがむ、かれわれらをすくいたまえばなり

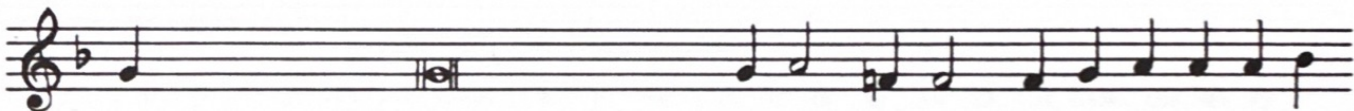
司 今も何時も世々に。



アミン 主やなんじの光えいをうたわんに、ほめうた



をもってわがくちにみたまえ、いのちをほどこ



す せいなるなんじのきみつをうくるを、われらにゆる



せばなり、いのるわれらをいさぎよきにまもり、



ひびになんじのみちをならわしめたまえ、アリル



イヤ、アリル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ

輔 謹みて立て、神聖、至浄、不死にして生命を施す天上の畏るべきハリストスの聖機
密を傾けて、よろしく主に感謝すべし。 詠 「主憐めよ、主憐めよ」

輔 この日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを求めて、われらおのれの身、および
互いに各々の身をもって、ならびにことごとくのわれらの生命をもってハリストス
神に委託せん。 詠 「主なんじに」

司 けだし、なんじはわれらの成聖なり、われら光栄をなんじ父と子と聖神に献ず、今
も何時も世々に。 詠 「アミ ン」

司 平安にして出ずべし。 詠 「主の名によって」

輔 主に祈らん。 詠 「主憐めよ」



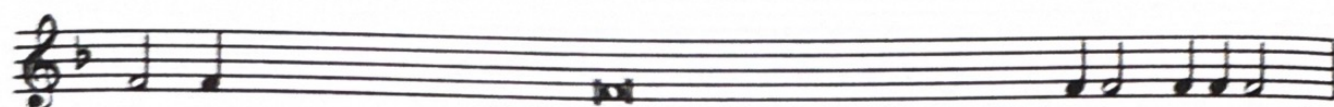
司 なんじを讃揚するものに福を降し、およびなんじを待むものを聖にする主や、なんじの民を
救い、およびなんじの嗣業に福を降し、なんじが教会の充満を守り、なんじが堂の美なるを
愛するものを聖にせよ。なんじが神聖の力をもって、かれらを光栄し、およびわれらなんじ
を待むものを残すなかれ。なんじの世界となんじの諸教会と、諸司祭とわが今上天皇、およ
びなんじの衆人に平安を賜え。けだし、およそ善なる施し、およその全備なる賜は上より、
なんじ光明の父より降るなり。われら光栄、感謝、伏拝をなんじ父と子と聖神に献ず、今も
何時も世々に。



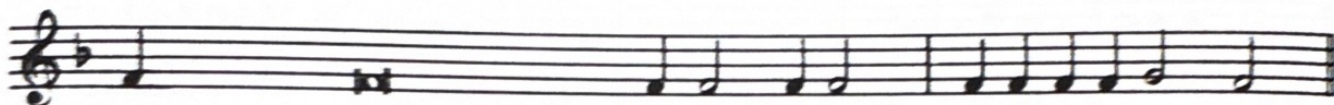
司 願わくは、主の降福は、その恩寵と仁愛とによりて常になんじらにあらん、今も何時も世々に。

詠 「アミン」

司 ハリストス神、われらの侍や、光栄はなんじに帰す、光栄はなんじに帰す。



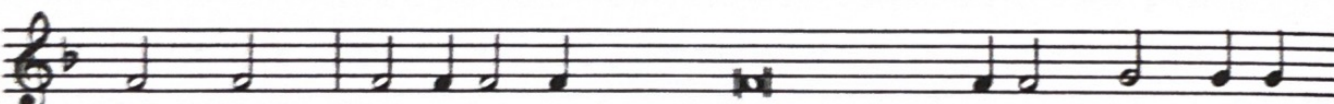
光 えいはちちとことせいしんにきすいまでもいつもよよにアミン



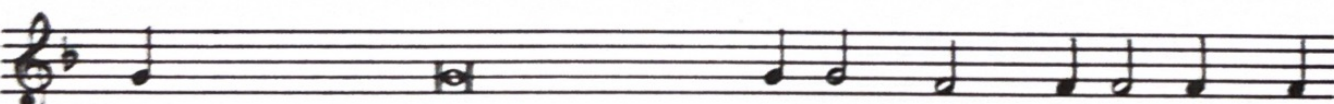
主あわれめ、主あわれめ、主あわれめよ ふくをくだせ

司 死より復活せし ハリストスわれらの真の神は、その至浄なる母、光栄にして讃美たる聖使徒、われらの聖神父コンスタンティノポリの大主教金口イアオン、聖人（某）および諸聖人の祈禱によりて、われらを憐み救わん、かれは善にして人を愛する主なればなり。

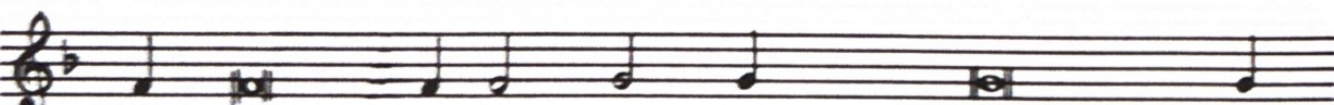
万
寿
詞



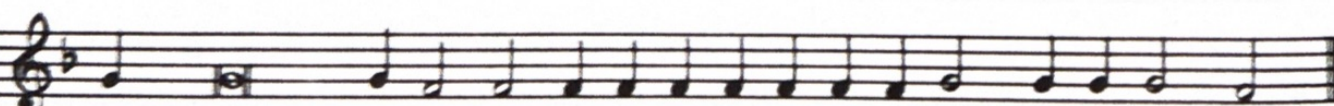
アミン かみや、わがくにの今上天皇を、皇后



皇太子、皇太子妃および皇ぞくを、われらの



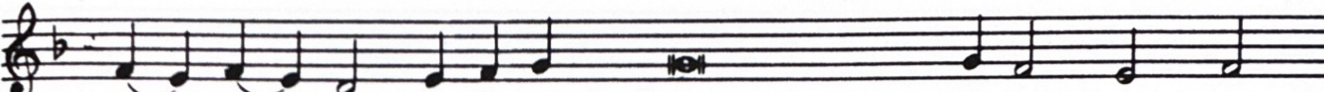
府主教フェオドシイ、およびことごとくの正教の

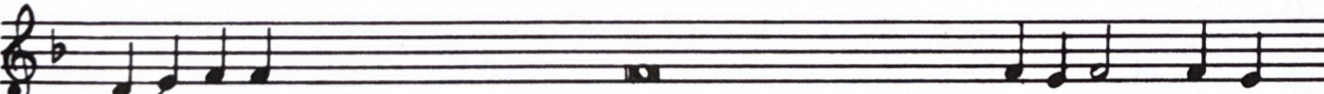


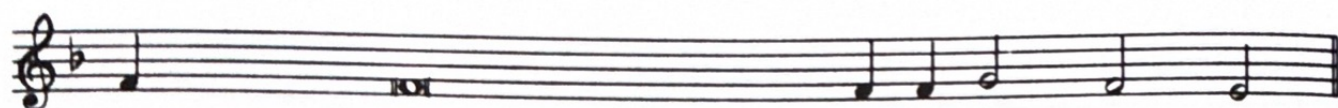
ハリストイアニンらを、いくとせにもまもりたまえ

共 頌 歌

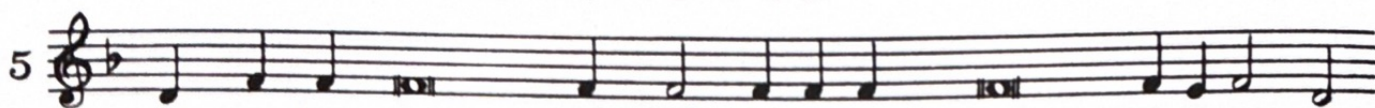
1 
わがくちをひらきて、せいしにみてられ、ことばを
を女王母にたてまつり、たのしみいわーい、よ
ろこびてその奇蹟をうたわん

3 
生神女、せい活にしてつきざるいずみや、
祝うてなんじを讃め歌う者の霊をかため、彼等
になんじが神妙なる光栄のうちに、栄冠を
被むらしめたまえ、

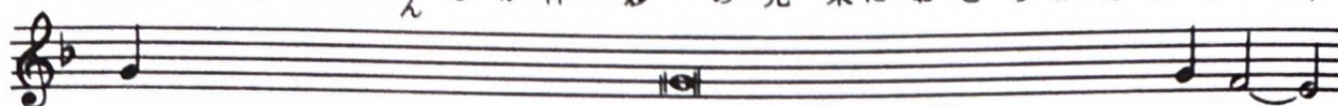
4 
光栄のうちに神性の宝座に座するイイス神
は、かるき雲に乗るがごとく朽ちざるの
手にいだかれ来たりて、ハリスや、光栄はなん



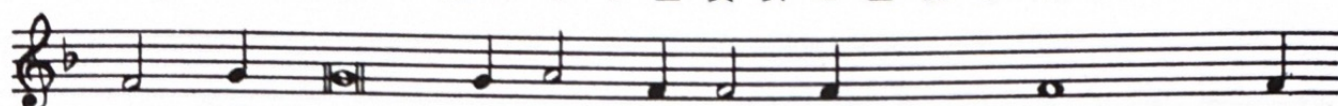
じのちからに帰すと呼ぶものを救いたまえり



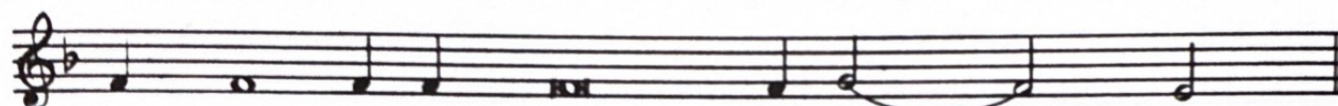
5 万物はなんじが神妙の光栄におどろかざるなし、



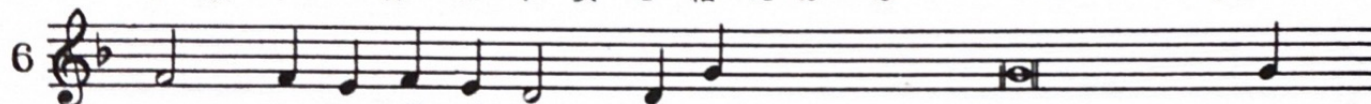
なんじ婚配を知らざる童貞女は至上の神をはら



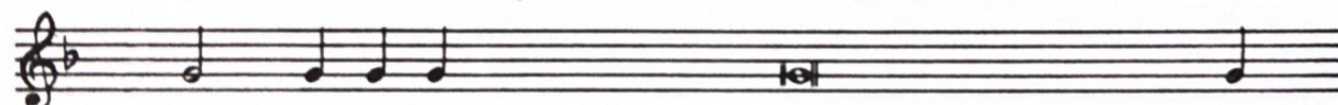
み、永遠の子を生みて、およそなんじを讃



め歌う者に平安を給えばな一り



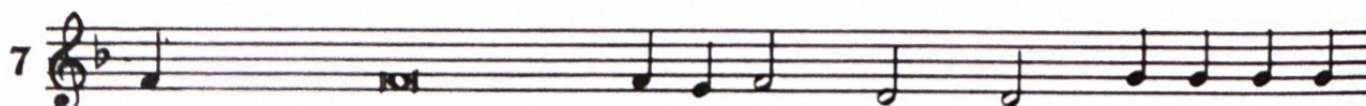
6 かみの信者や、来たりて神の母の子の神



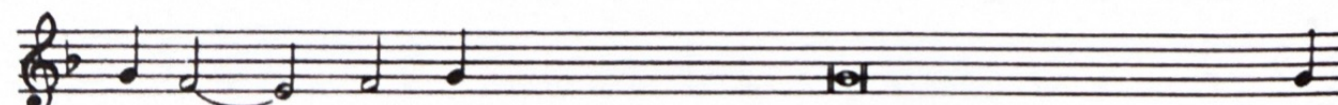
妙なる至って尊ときまつりを祝い手を



打って、かれより生まれし神を讃えいせん



7 敬虔の者は造物主にかえて、造ぶにつ



かえず、火のおどしを勇ましくふみて喜こび

う た え り、 讃 美 た る 主 先 祖 の か み や、

なん じ は あ が め ほ め ら る わ れ ら 神 を ほ め

あ が め 伏 し お が み て、 世 世 - に う た い ほ め ん

8 生 神 女 の 産 は、 け い 虔 の 少 者 を い ろ り の う ち に

ま も れ り、 そ の 時 に あ ら か じ め 記 る

さ れ、 今 す で に か な い し こ の 産 は、 全 世 界

に す、 め て なん じ に う た わ し む、 造 物

は 主 を う と う て、 世 々 に ほ め あ げ よ

9 お よ そ 地 に 生 ま る る も の は、 聖 神 に 照 さ れ て、

た の し み、 か た ち な き 知 え の 性 も い わ

い、^{かみ}神の^{はは}母の^{せい}聖なるまつりを^{とう}尊とみて呼
 おべし、^{いた}至つて^{ふか}福なる^{いさ}潔ぎよき^{しょう}生^い神
 女、^は永^い貞^{どう}童女やよろこべよ

イルモス 第一歌頌

1 死^しせざるの主や、なんじの^{かつ}勝のみーぎの
 手は、かみにかなうがごとく、ちか
 らにてさかえをあらわせり、その^{ぜん}全^{のう}能なる
 によつて、てきをほろぼし、イズライリ
 人のために、^{あら}新^{あか}たなる^み深^み水の^{みち}道を開きたまえばなり。
 3 ひとりひとの^{せい}性のよわきを知って、あわれ

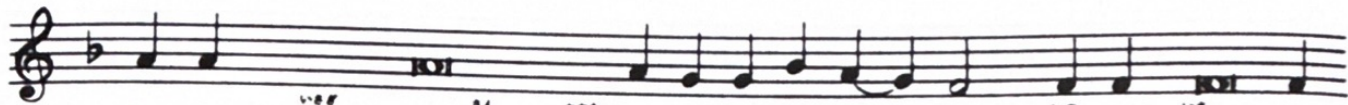
みを以て、これを衣たるものや、われに上よりの
 ちからをおびてなんじに呼ばしめたまえ、ひと
 をいつくしむの主や、なんじは云いがたきなんじ
 の光えいのせいにしていけるみやなり
 アワクムは先知の目にて、なんじ神の恩寵におゝ
 わるるやまを見て、イズラエルの聖なるものが、
 われらを救いあらたむるがため、なん
 じよりいずるを預言せり。
 おのれの降臨のひかりにて、世界のはてを
 てらし、おのれの十字架にてこれをかが

や か せ し、^{ハリス} ス ト ス や、 な ん じ が 知 恵 の
 ひ か り に て、 た だ し く な ん じ を う た う も の の
 こ 、 ろ を、 て ら し た ま え。

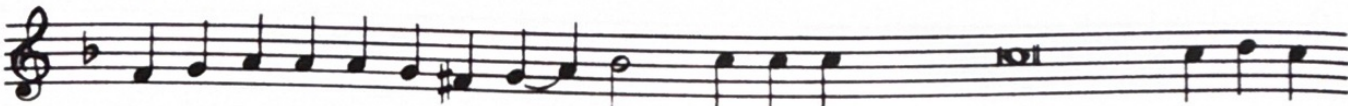
6 ^{いま} 今 を ^{かぎり} 限 の 瀬 は わ れ ら を か こ め り、 脱 が
 れ し む る も の な し、 わ れ ら は 屠 所 の ひ つ じ
 の ご と し、 わ が か み や な ん じ の た み を
 す く え、 な ん じ は ^{よわ} 弱 る も の の ち か ら と、 あ
 ら た め な れ ば な り。

7 ^{しょう} 生 ^{しん} 神 ^{じょ} 女 や、 わ れ ら ^{しん} 信 ^{じや} 者 ば な ん じ を み て、
 た ま し い あ る い ろ り と な す ^{とう} 尊 と ま る る も の が

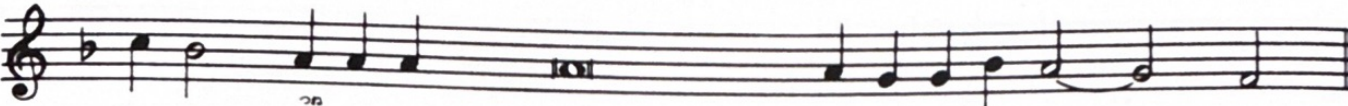
三 人 の 少 者 を す く え る と く、 先 祖 の あ が
 め ほ め ら る る か み は、 なん じ の は ら に お い
 て、 全 世 界 を 改 た め た ま え ば な り。
 わ れ ら 神 を ほ め あ が め、 伏 し 拝 が み て 世 々 に う た い
 8
 ほ め ん、 イ ス ラ エ ル の 少 者 は い ろ り に あ つ て、 る つ
 ほ に あ る が と く、 敬 虔 の う る わ し き に て 黄 金
 よ り も、 あ き ら か に か が や き て い え り、 主 の こ
 と ご と く の 造 物 は 主 を あ が め 讃 め こ
 れ を う と う て、 世 々 に 讃 め あ げ よ。
 9
 生 神 女 や も ゆ れ ど も 焼 か れ ぬ い ば ら は



 なん じが 潔^{いさぎ}よき 産^{さん}の 形^{かたち}を あらわ せ り 祈^{いの}る 今^{いま} も



 わ れ ら を せ め か こ む い ざ な い の い ろ り を う ち け



 し て、 常^{つね} に なん じ を あ が む る を い た さ せ た ま え

イルモス 第二歌頌

1 

 全^おた く そ な わ れ る ち か ら は、 む か し フ ア ラ オ ン の



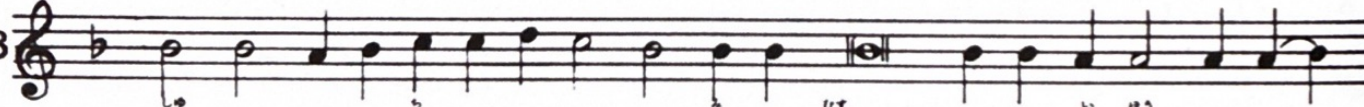
 全^{せん}軍^{ぐん} を ふ か み に 敷^ひ き、 人^{ひと}た い を と り し こ と ば、



 讃^{さん} え い せ ら る る 主^{しゅ} は、 よ ろ ず の 悪^{あく} を い た す の つ み



 を ほ ろ ぼ し た ま え り、 そ の 光^ひ え い か が や け ば な り

 3 

 主^{しゅ} や あ れ 地^ち の ご と く、 実^じ を 結^{むす} ば ざ る 異^い 邦^{ほう} の 教



 か い は、 なん じ の 来^き た る に よ っ て、 百^{ひゃく} 合^{ごう} の ご と

くはなさけり、わがこゝろもこれによつて、かた
められたり 童てい女によつて、来たりし
ものは、使者にあらず、神使にあらず、主みずから
人たいをとりにて、われ全たき人をすく
いたまえり、ゆえにわれなんじに呼ぶ、主や、
光 えいはなんじのちからに帰す。
5 ハリス トス か みや、なんじはかみとひとと
のなかだちこなれり、主さいや
われらは、なんじによつて無知のやみより
ひかりのもとなる、なんじのちちにつくを

6

得^えた れば な り。 わ れ は つ み の

ふ ち に お ほ れ て、 な ん じ が あ わ れ み の は か

り が た き ふ ち に 呼^よぶ、 か み や わ れ を ほ ろ

び よ り、 引^ひき あ げ た ま え

7 不^ふ法^{ぽう} な る し い た げ び と の、 か み に も と る み こ

と の り は、 た か き ほ の お を お こ せ ど も、

ほ め う た わ る る ハ^ハリ^{リス}ス は、 敬^{けい} 虔^{けん} の 少^{しょう} 者^{しゃ}

に せ い 神^{しん} の つ ゆ を く だ し た ま え り。

わ れ ら 神^{かみ} を 讃^{ほめ} め あ が め 伏^ふ し 拜^{ほが} み て 世^よ 々 に う た い ほ め ん

8 昔^{むかし} ワ ヴ ィ ロ ン の 火 の い ろ り は、 か み の み こ と の

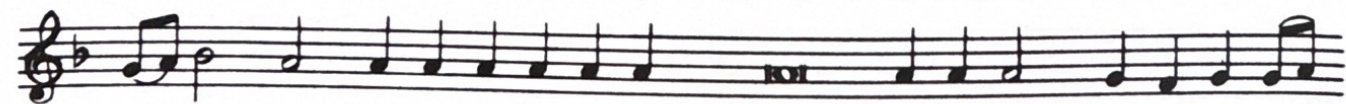
り に て、 そ の い き お い を わ か ち、 ハ ル デ イ を
 焦 が し て、 信 者 を す ず し う せ り、 主 の こ と ご と く
 の 造 ぶ つ は、 主 を あ が め ほ め よ と う た え ば な り
 9 無 限 の ち ち の 子、 か み と 主 は、 童 て い 女
 より 人 た い を と り、 わ れ ら に あ ら わ れ て、 く ら ま さ
 れ し も の を あ か し、 散 ら さ れ し も の を あ つ め
 た ま え り、 ゆ え に わ れ ら、 讃 美 た る 生 神 女 を、 あ が め う と う。

イルモス 第三歌頌

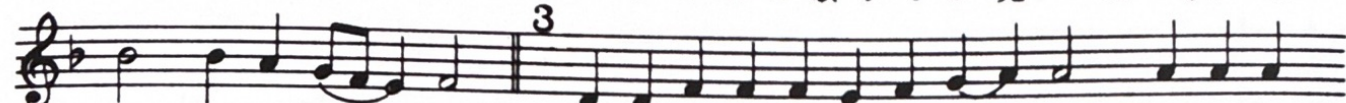
1 む か し 神 妙 の ま た た き に て、 み ず を ひ と つ
 に あ つ め、 ま た イ ズ ラ イ 人 の た め に う



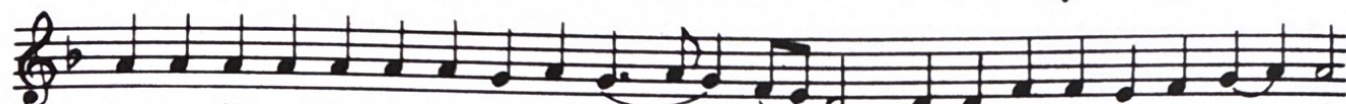
みをわ か ちしものは、これあがめほめらるるわがか



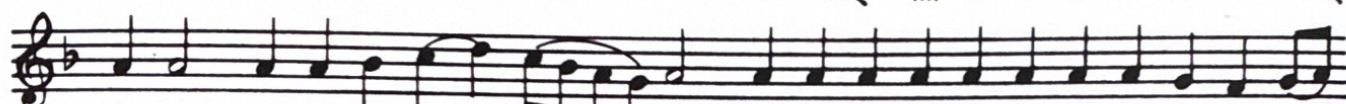
み な り、われら^{ひと}独 りかれに^{うた}歌うその光 えい、かが



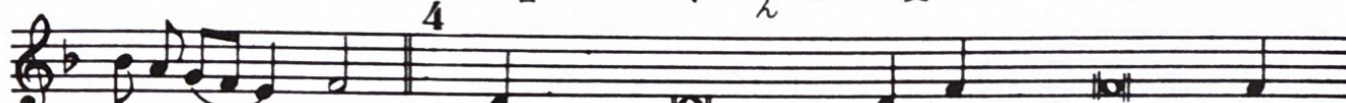
や け ば な り。こ と ば に て つ く ら れ、^{せい}聖 ^{しん}神



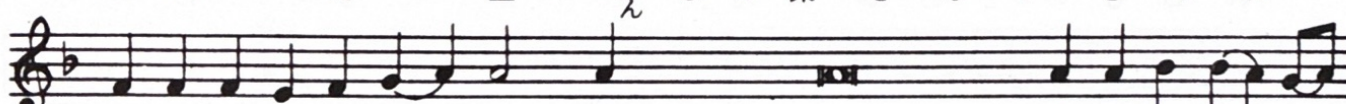
に て ^{そな}備 え ら る る ^{ばん}万 お つ を、^な無 き よ り い だ せ し、



^し至 ^{じよう}上 な る ^{かん}全 ^{のう}能 ^{しゃ}者 や、^{なん}なん じ の ^{あい}愛 に わ れ を か た



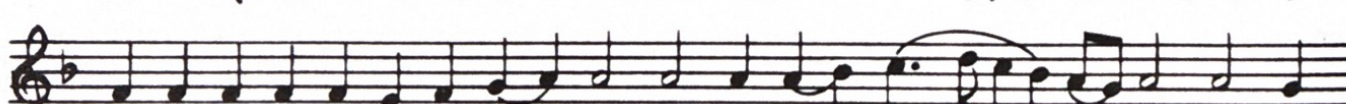
め た ま え。主^{しゅ}や ^{なん}なん じ は ^{ふか}深 き あ い を わ れ



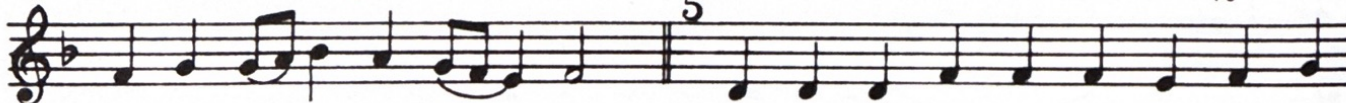
ら に あ ら わ せ り、われらのために^{なん}なん じ の ^{ひと}独 せ い の



子 を、^し死 に わ た し た ま え ば な り、^{ゆえ}ゆ え に わ れ ら



^{かん}感 ^{しゃ}謝 し て ^{なん}なん じ に ^よ呼 お、^{しゅ}主 や ^{こう}光 え い は、^{なん}なん じ



の ち か ら に ^{かへ}帰 す。 ^{なん}なん じ ^{ばん}万 お つ を つ く り

し主、 さとりがたきへい安に、 あさの祈り

をたてまつる、なんじのいましめは光りなるによ

り、 われにこれをおしえたまえ。

6 いまをかぎりのつみのふちはわれをかこみ、

わがたましいはほろびんとす、いのる主さい

教導者や、なんじの尊とき手をのべて、

7 われをペトルのごとく、すくいたまえ。むかし敬

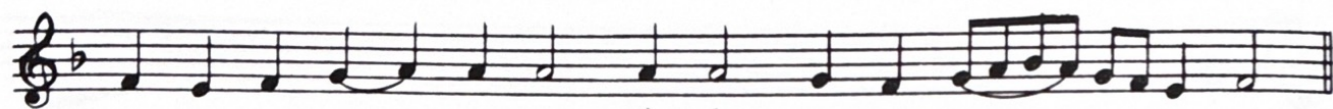
虔なる三人の少者を、ハルデイのほのおにすず

しうせしごとく、われらをも神性のあかるき火にかが

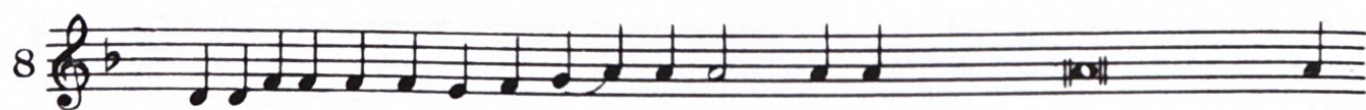
やかしたまえ、わが先祖のかみや、なんじはあが



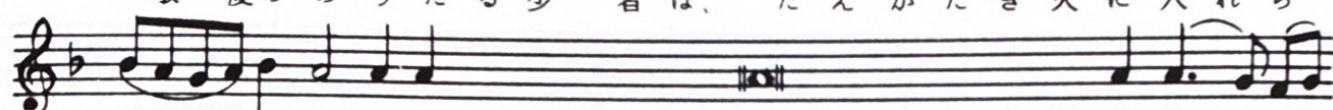
めほめらると、呼べはな り われら神をほめあがめ



ふしおが みて、世々にうた いほめん



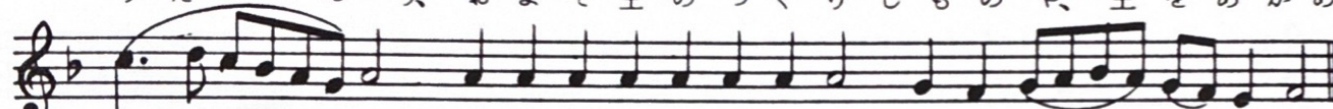
敬虔ののりたる少者は、たえがたき火に入れら



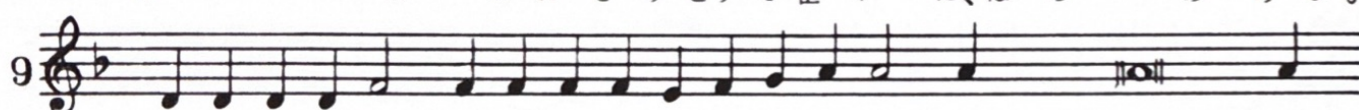
れしに、ほのおになやまされずして、神のうたを



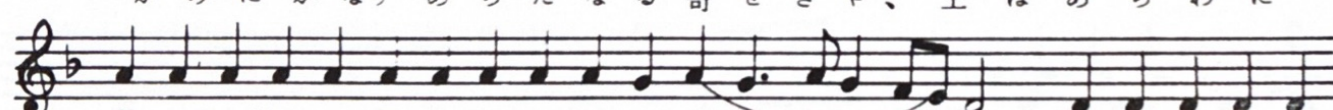
うた えり、およそ主のつくりしものや、主をあがめ



ほ め これをうとうて世々に、ほめ あげよ。



かみにかなうあらたなる奇せきや、主はあらわに



童貞女の閉ざせる戸を、通り入るときは



無けいのかみにして、いずるときは、人体を



衣たるものとな り、戸はもとのままと



イルモス 第四歌頌

1

い に し え の イ ズ ラ イ リ は 足 を め ら さ ず し て、 う み の く れ
な い の ふ ち を わ た り、 野 に て モ イ セ イ の 十 字 か た の て に て、
3
ア マ リ ク の ち か ら に か て り、 ハ リ ス ヤ ナ ン じ の 教
か い は、 な ン じ の た め に た の し み て 呼 ぶ、 主 や、 な ン じ
4
は わ が 力 と か く れ が と か た め な り 教 か い
は な ン じ、 義 の 日 が 十 字 架 に 上 げ ら れ し を み
て、 な ら び 立 ち て た だ し く 呼 べ り、 主 や、 光 え い は な ン

5

じのちからに帰す 主やなんじはわれのひ
 か り、信じてなんじをあがめ歌うものを暗き無知
 より引き出だす、聖なる光にして世界に來たりたまえり
 6
 あわれみによつてなんじのわきばらよりながせし血にて、
 あくまのまつりの血より浄められし教かいはんじに呼ぶ、
 主やほめあげの聲をもつてなんじをまつらん
 7
 アウラムの少者はペルシャのいろりにありて、
 ほのおよりもつよく敬虔の愛にやかれて呼べり、
 主やなんじが光えいの宮においてなんじは、あがめほめ
 らるわれらかみをはめあがめふしおが

8

みて、世々にうたいはめん ダニイルは

獅子あなに手をのばして、獅子のくちをとざし、

敬虔のあつき少者は、とくをおび、火のちからをけして

呼べり、主のことごとくの造ぶつは主をあがめほめよ

9

童てい女や手にて切られざるすみいしハリスは、なんじ切られざる

やまよりきりわけられて、はなれたるせいをあわせたまえり、

故にわれら楽しんでなんじ生神女を、あがめうとう

イルモス 第五歌頌

1

つよき手にてたたかいはほろぼすハリスは、うまと乗り

てを紅の海におとし、かちうたをうとう、イスライリ

3

をすくいたまえり。おのれのみことのりにて、^う空

しきに^ち地をかため、^{たも}保ちがたく^{おも}重きものをかけし^ハリ^マトス、

ひとり^{じん}仁慈にして^{ひと}人を愛するの^{しゅ}主や、^{なん}なんじがいましめのう

ごかざる^{きようかい}いしに、^{なん}なんじの教会をかたくたてたまえ。

4

^ハリ^マトスや、アワクムは^{せん}先知の^め目にて、^{しん}なんじが^{みょう}神妙のへりくだりを

さと^{なん}り、おののきて^{なん}なんじに呼べり、^{なん}なんじのたみを

すくい^{なん}なんじのあぶらせられしものを、すくわんがために

5

来たり^{こゝろ}たまえり。ひかりを衣のごとく衣るものや、

われ^{なん}なんじに^{あさ}朝の^{いの}祈りをたてまつりて、^{なん}なんじに呼^よぶ、

^ハリ^マトスやわがくら^{たましい}まされし^{たま}霊をてらしたまえ、^{なん}なんじは^{ひと}独り

6

仁慈の主なればなり。主さいハリストスや、たま

しいをやぶるあらしに、あうさるるよ、のうみをしずめ

て、われをはろびよりたすけたまえ、なんじは仁慈

7

の主なればなり。尊とまるる先祖の主は

ほのおを消し、少者をすずしうせり、かれらはこころをあわせて、

なんじはあがめほめらるとうたえばなり。

われら神をほめあがめ伏し拝みて世々にうたいほめん

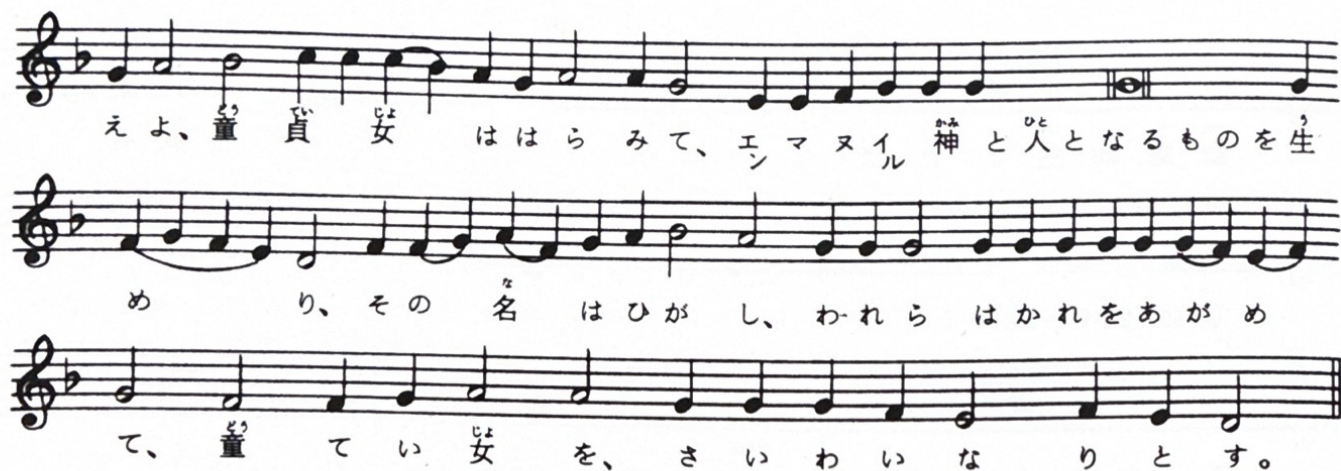
8

少者はいろりにありて、なんじ万物を造りし主のまえ

に、全世界の詠たいとなつてうたえ、こことくの造物は

9

主をうとうて、世々にあがめほめよ。イサイヤいわ



えよ、童 貞 女 ははらみて、エマヌイル 神と人となるものを生
め り、その 名 はひが し、われら はかれをあがめ
て、童 て い 女 を、さ い わ い な り と す。

イルモス 第六歌頌



1 イズ イリはくが のごとく、測 をふみわたり、おいつ
め し フラ オンの、おほるるを見て呼べり、かちうたを
3 か みに た て ま つ ら ん な ん じ が 信 者 の つ の を た
こ う し わ れ ら を な ん じ が 承 認 め の 石 に か た め
し、仁 慈 の 主 わ が か み や、な ん じ と ひ と し く せ い な る は な し
4 尊 と き 教 か い は、きよきところより 主のためにい わ

い、か みにかのう て呼びうとう、^{ハリス} スはわがちからとか みと 主

5
なり、^{しじん} 至仁なるか みのことば や、せつにい の る、なん

に朝の祈禱をたてまつるもののたましいを、^{なん} さんが 神 の

ひかりにて、てらし、^{なん} 罪のやみより、呼び出だすまことの

6
かみをしらしめたま え いざないのあらし

にて、なみのたちあがる世のうみを見て、^{なん} じの

穏やかなる港に着きて呼ぶ、あわれみふかき主

や、わが^{いのち} 生命をほろびよりすくいたま え

7
か みのつかいはいさぎよき^{しょう} 少者のためにいろりに

露をいだしめ、ハルデイを焼く^{かみ} 神のみことの りは、

苦^くしむるものにうたわしむ、わが先祖^{せんそ}のかみやなんじ
 はあがめ、ほめらる。われら神^{かみ}をほめあがめ伏しおがみて、
 8
 世^よ々にうたいはめん。ハリス^{ハリス}トやなんじはいさぎよきものの
 ために、ほのおより露^{つゆ}をながし、義人^{ぎじん}のまつりの
 ために、水^{みづ}より火^ひをいだせり、なんじはひとつの望^{のぞみ}にて
 9
 万^{ばん}事^じを行いたまえはな^なり、われらなんじを世^よ々にほめあぐる
 かみのつかいすら、見るを得^えざるかみは、ひと見
 るあたわ^なず、ただなんじ至上^{じじょう}のものによりて、人^{じん}
 体^{たい}をとりしことばは人々に現^{あら}われたたまえり、
 われらかれをあがめて、天^{てん}軍^{ぐん}とこちになんじを、さいわいなりとす

イルモス 第七歌頌

1



主やかって、ながれやすきせいのみづは、なんじのまたたきにて
 地のすがたにかわれり、ゆえにイライリ足を濡らさずわたりて、
 かちうたをなんじにうとう。はじめに全能のことばにて、天を
 かため、あたわざるなきせい神にて、そのことごとくのちから
 をそなえし主、きゅうせい主やなんじが承認めの動かざる
 いしに、われをかためたまえ うちのふところを
 はなれずして、地にくんだりしハリスカみや、われなんじのお
 もんばかりのひみつをききて、なんじ独り人を愛するの
 主を、ほめあぐる ハリスや夜は信ぜざるもののためにあか

るから ず、信^{しん}者^{じゃ}のた^ためにはなん^んじのこ^ことばを甘^{あま}んずるにより
 てあかる^あし、故^ゆにわれ朝^{あさ}のいのりを⁶なん^んじにたてまつりて、
 なん^んじの神^{かみ}せいをほめうとう、^{ハリス}ス^スやわれイオナ
 のごとくなん^んじによぶ、われよのおもんばかりの^{うみ}海^{かい}に
 ただよい、罪^{つみ}のなみにしずめられ、たましい
 をほろぼすたけきけものにくださるるものを、死^しの^み淵^{ふち}より
 ひきあげたまえむかし^い少^{せう}者^{しや}はもゆるいろ
 りを、つゆをいだすものとあらわし、^{ひと}一^{いつ}つの神^{かみ}をうとうて
 いえり、なん^んじはあがめほめらるる^{せん}先^{せん}祖^そのかみなり
 われら神^{かみ}をあがめ伏^ふし拜^をみて世^よ々にうたいほめん

8

も ゆ れ ど も や け ざ る シ ナ イ の い ば ら は く ど も り て こ と ば

お そ き モ イ セ イ に か み を あ ら わ し、 か み を し と う あ つ き

こ こ ろ は 三 た り の 少 者 を 火 に 焼 か れ ざ る う と う

も の と な せ り、 主 の こ と ご と く の 造 お つ は 主 を う と う

9

て、 世 々 に ほ め あ げ よ け が れ に そ ま ず し て

生 み、 よ ろ ず の 物 を つ く り し こ こ ば に 体 を か せ し お

と を し ら ざ る の は は 生 神 童 貞 女、 い れ が た き

も の の う つ ね か ぎ り な き な ん じ の 造 成 主 の す ま い

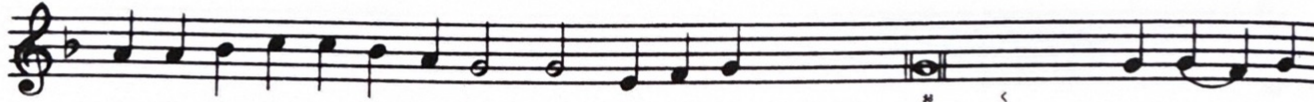
や わ れ ら な ん じ を あ が め ほ む

イルモス 第八歌頌

1



むかしきせきをおこなうモイセイのつえは、十^{じゅう}字^じかたに

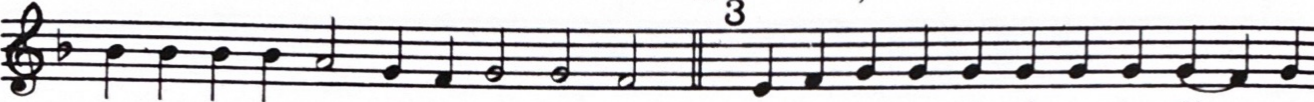


うちてうみをわかし、くるまにのりて追^おい^く来るアラオンを

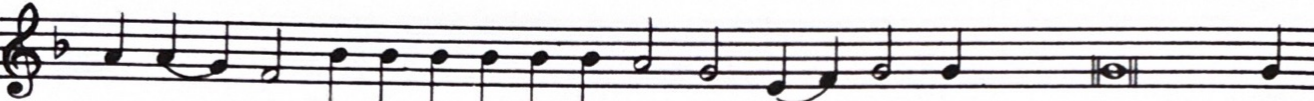


しずめ、徒^あ歩^ちにて逃^にがるるイス^いラ^すイ^いリ^り神^{かみ}をほめうと

3



ものをすくいたまえりはじめに知^ち恵^ゑにて天^{てん}を



かため、地^ちを水^{みづ}にたてし^しハ^はリス^{りす}や、なんじがい

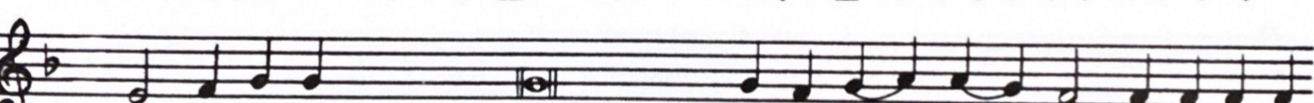


ましめのいしに、われをかためたまえ、なんじ

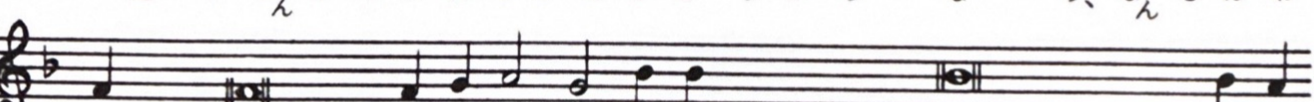


独^{ひと}り人^{ひと}をいつくしむ主^{しゅ}のほか、聖^{せい}なるものなければなり

4



主^{しゅ}やなんじはわれのかためとちからなり、なんじはわ



れの神^{かみ}とよろこびなり、なんじは父^{ちち}のふところをはな

れずして、いやしきわれにのぞみたまえり、ゆえに予言

者アワクム と共に^{とも}なじに^{なん}呼^よぶ、ひとをいつくしむの主^{しゅ}や

光 栄^いは、なん^んじのちからに 帰す。 かくれざ るひかり

や、なんぞわれをなんじのかんばせよりしりぞけしや、ほかの

やみは憐れなるわれをおえり、いのるわれをかえして、

わがあしをな、じのいましめのひかりにむかわしめた

ま え。 きゅう せ 主 や わ が 不 法 は 多 し、 い の る

われをきよめたまえ、われを悪の淵より引きあげた

ま え、われ_{なん}じに呼_よべば な り、わが 救_{すく}いの 神_{かみ} や

われにききたまえ。むかしワビロンの火は

神の光臨にはじたり、ゆえに少者はいろりにあって
 はなぞのにあるがごとく、いわいうたえりわが先
 祖のかみや、なんじはあがめほめらる
 われら神をほめあがめ伏し拝みて、世々にうたいほめん
 8 ハルデヤのくるしめびとは、いかりにたえずして、敬虔の
 もののために、炉を七倍あつしたれども、うえのちからの
 これをすくうをみて、造物主と救世主に呼べり、
 わらべやあがめほめよ、司さいやほめうたえよ、民や万
 9
 世に尊とみあがめよ 天はおそれ地のはては
 おどろけり、神は身にてひとびとにあらわれ

三行の楽譜。各行は五線譜で、メロディは黒い音符で記されている。歌詞は日本語で、漢字とひらがなが混在している。一部の文字には小さなカタカナの読み仮名が振られている。

第一行の歌詞: なん じの 腹 は 天 より 広 き も の と な り た れ ば な
 (読み仮名: なん じの はら は てん より ひろ き も の と な り た れ ば な)

第二行の歌詞: り、 ゆ え に 神 の 使 と 人 々 の 群 れ は なん じ 生
 (読み仮名: り、 ゆ え に かみ の つかい と ひと ひと の り れ は なん じ しょう)

第三行の歌詞: 神 女 を、 あ が め ほ む
 (読み仮名: しん じょ を、 あ が め ほ む)

昭和 56 年 2 月 27 日 初 版
平成 2 年 12 月 1 日 第 2 刷

単音聖歌譜 聖 体 礼 儀



発行所 日本ハリストス正教会教団
〒101 東京都千代田区神田駿河台4丁目1番地
TEL 03(291) 1885

印刷所 株式会社 愛 甲 社
〒161 東京都新宿区西落合1-26-6
TEL 03(952) 4466

